久 宝 寺 遺 跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告55

I 久宝寺遺跡(第8次調査)

Ⅱ 久宝寺遺跡(第17次調査)

1997年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

久 宝 寺 遺 跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告55

- I 久宝寺遺跡(第8次調査)
- Ⅱ 久宝寺遺跡(第17次調査)

1997年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、久宝寺遺跡で実施致しました第8次調査(平成3年度)、第17次調査(平成5年度)の遺物整理等が完了し、これらをまとめて調査報告書を刊行する運びとなりました。久宝寺遺跡は八尾市の西部に位置し、これまでの数多くの発掘調査により、縄文時代晩期から連綿と続く複合遺跡であることが確認されております。今回報告の調査においても、弥生時代後期から近世にわたる重要な成果が得られました。特筆すべきものとして第17次調査では、古墳時代前期の土坑内から紡織具の部材が出土しており、当時の生活様相を究明するうえで貴重な資料を提供してくれました。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されること を願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会 理事長 木山 丈司

序

- 1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した久宝寺遺跡の発掘調査報告書であり、 平成3年度の第8次調査(KH91-8)、平成5年度の第17次調査(KH93-17)の報告を集録したものである。
- 1. 内業整理は各現地調査終了後に着手し、平成9年3月31日をもって終了した。
- 1. 本書に集録した発掘調査報告書は各調査員が作成し、文責等は各例言に記したが、本書を まとめるにあたっては高萩千秋が編集作業を行った。
- 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図(昭和61年8月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成8年10月1日改訂)を使用した。
- 1. 本書で用いた標高の基準はT.P. (東京湾標準潮位)である。
- 1. 本書で用いた方位は、座標北である。
- 1. 遺構は下記の略号で表した。

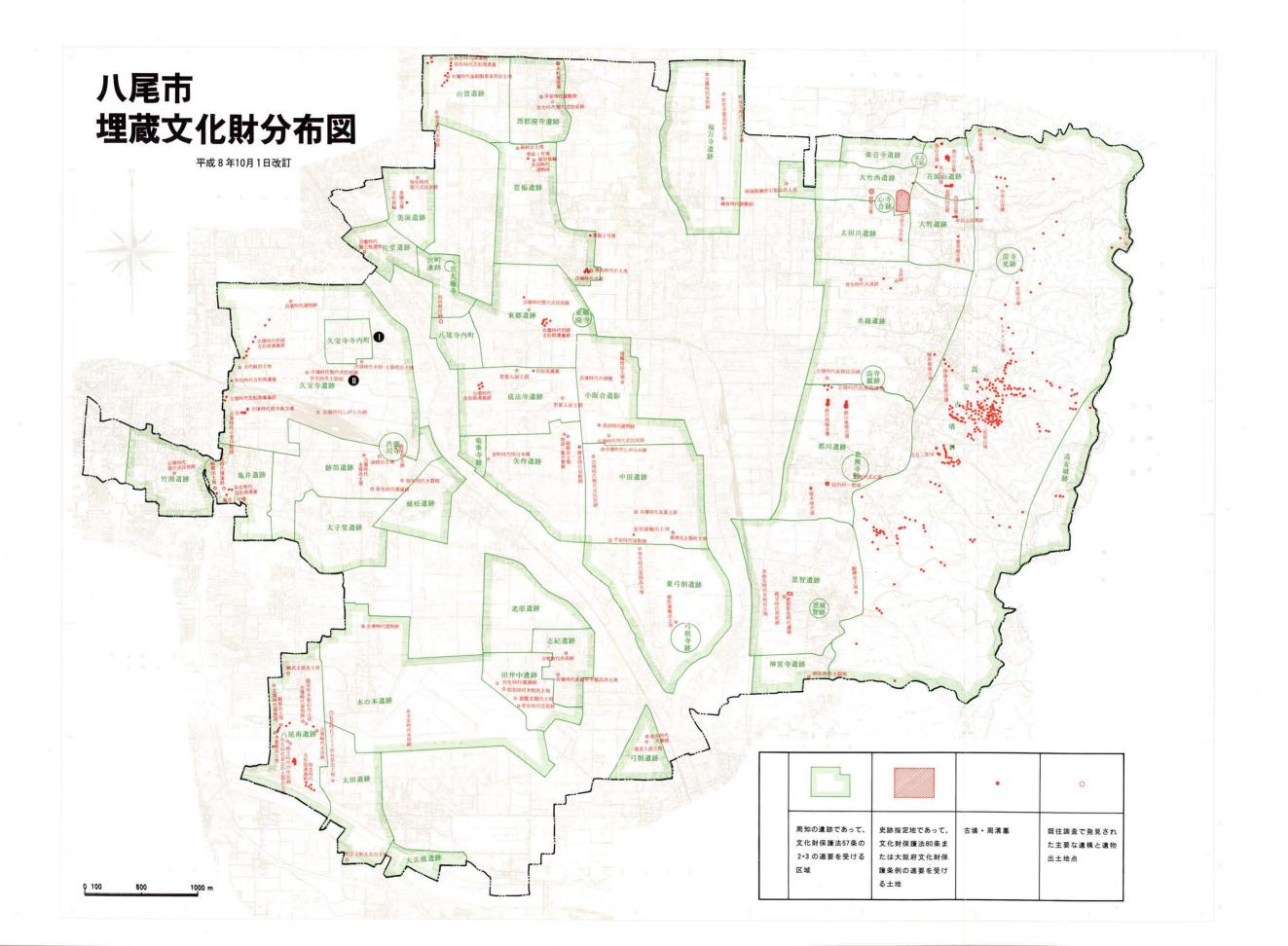
 竪穴住居——SI
 井戸——SE
 土坑——SK

 ピット・柱穴・小穴——SP
 溝——SD
 落ち込み——SO

- 1. 遺物実測図の断面は、木製品を斜線とし、他は白とした。
- 1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

Vä	はしがき							
序	,							
J	【尾市埋蔵文化】							
1	久宝寺遺跡	(第8次調査)		• • • • • • •	• • • • • • • • •	 		• 1
Ι	1 久宝寺遺跡	(第17次調査)	 			 	• • • • •	· 29



I 久宝寺遺跡第8次調査 (KH91-8)

例 言

- 1. 本書は、八尾市久宝寺2-2-33で実施した久宝寺遺跡第8次調査(KH91-8)の発掘調査報告書である。
- 1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第104号 平成2年11月26日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当し、一部同研究会の高萩千秋・原田昌則・成海佳子がこれを補佐した。
- 1. 現地調査は、平成3年6月20日に着手し、同年7月27日に終了した。調査面積は約650 m²である。
- 1. 現地調査には、東 秀之・荒川和哉・磯上サカエ・沖田純一・坂下 学・西田 寿・能 勢直樹・濱田千年・正木洋二・山内千惠子の参加を得た。
- 1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聡子が参加し、現地調査終了後に着して平成9年3月31日をもって終了した。
- 1. 本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の1地形図から起こした座標北を示している。
- 1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表を主に田島が作成した。

本文目次

第	1	章	l	は	じめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第	2	章	Ē	調	<u> </u>	3
	第	11	前		調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
	第	2 1	前		基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ と	1
	第	3 筐	前	,	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	-
第	3	章	Ļ	出.	土遺物観察表····· 2	4
第	4	章	,,,	ま	とめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2	8

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図 (S=1/5000) ······2
第2図	地区割図 (S=1/400) ······3
第3図	基本層序 (S=1/40)4
第4図	第1次面平面図 (S=1/200) ······5
第5図	SE 102平・断面図(S=1/10)・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第6図	第 2 次面平面図 (S = 1 / 1 0 0) · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第7図	第 2 次面遺構出土遺物 (S=1/4) ······12
第8図	S I 301平・断面図 (S=1/50) ······12
第9図	第3次面平面図 (S=1/100) ······13~14
第10図	SK303平・断面図 (S=1/50) ······15
第11図	第 3 次面遺構出土遺物① (S = 1 / 4) · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第12図	SK305平・断面図 (S=1/50) ······17
第13図	S D 301出土遺物①(S = 1 / 4)······18
第14図	S D 301出土遺物② (S = 1 / 4) · · · · · · · · 19
第15図	S D 301出土遺物③ (S = 1 / 4) · · · · · · · · 20
第16図	第 3 次面遺構出土遺物② (S = 1 / 4) · · · · · · · · · · · · 22
第17図	第5 · 6層出土遺物 (S=1/4) ·······23
	丰 口 24
	表目次
表1 第	第2次面土坑 (SK 201~207) 法量表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表 2 多	第 2 次面溝(SD 201~231)法量表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
衣 4 5	第2次面牌 (SD 201~231) 法量表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	R Z 次面ビット (S F 201∼289) 法重表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	8 3 次面溝(SD301∼339)法量表・・・・・・・21
	ゎ 3 次面碑(SD 301~339) 伝重表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表 6	ゎる 久囲 ヒット (3F3U1~3∠O) 広里衣 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

図 版 目 次

図版1 西区第1次面(北から) 東区第1次面(北から)

図版 2 SE 102曲物 (上が東) SE 102断割り (西から)

図版3 西区第2次面(西から) 東区第2次面(北から)

図版4 西区第3次面(北から) 東区第3次面(北から)

図版5 SI301 (西から) SD301東半 (北東から)

図版6 SD301西半 (西から)

図版7 出土遺物 (SK301·SK302·SK304·SD301)

図版 8 出土遺物 (SD 301)

図版 9 出土遺物 (SD 301)

図版10 出土遺物 (SD301・第5層・第6層)



久宝寺小学校校門に建てられた石碑

第1章 はじめに

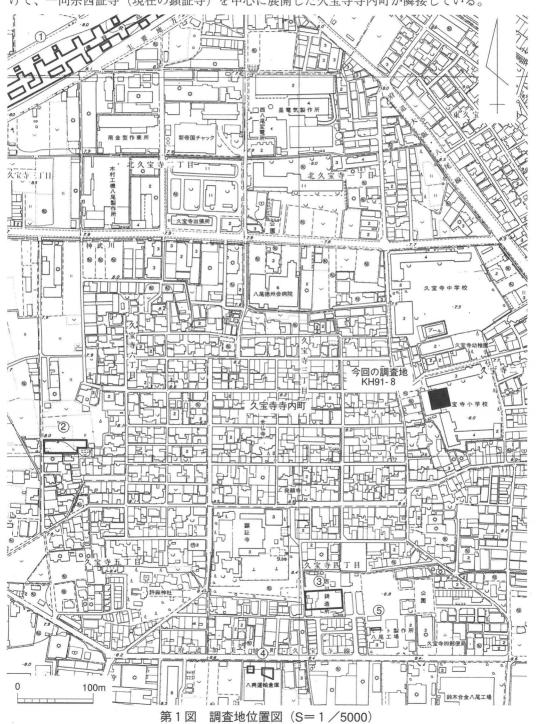
久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺1~3・久宝寺1~6・西久宝寺・南久宝寺1~3・神武町・亀井・北亀井町1~3・渋川・渋川町1~7がその範囲となっており、さらに西の大阪市域・北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・亀井遺跡・太子堂遺跡が存在する。なお西側の大阪市域では加美遺跡として調査が実施されているが、両遺跡は同一の遺跡として捉えられている。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。そして昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理〜吹田線関連の延長 1.5 kmに及ぶ発掘調査が開始され、このほぼ中位に位置する久宝寺遺跡は、北地区・南地区に分割され、昭和55年度から昭和61年度にわたって調査が実施された。また(財)東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会においても数次の発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晩期〜近世にわたる遺跡であることが確認されている。

このような情勢下の平成2年、当時の八尾市長山脇悦司氏から、八尾市久宝寺2-2-33に所在する八尾市立久宝寺小学校における屋内運動場建設の届出書が、八尾市教育委員会文化財室(現文化財課)に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたることから、平成2年11月15日に遺構確認調査を実施した。その結果、古墳時代前期の遺構・遺物包含層が確認され、同文化財室では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

久宝寺遺跡内北東部にあたる今回の調査地の近辺では、これまで発掘調査は実施されておらず、遺跡の様相は不明な地域であるといえる。周辺の調査成果をみると、前述した北西約600mの久宝寺遺跡北地区(①)では縄文時代晩期の自然河川・遺物包含層が検出されている。また古墳時代中期では韓式系土器の多量の出土が特筆される。西約500mで実施した当調査研究会第2次調査(②)においては、遺物包含層や奈良時代頃に埋没した河道から、弥生時代後期から飛鳥・奈良時代の土器が出土している。南西約300mの第3次調査(③)では、木棺・土器棺を主体部にもつ古墳時代前期(布留式期古相)の方形周溝墓1基の他、平安時代では水田・自然河道が検出されている。この付近では、南西部の第17次調査(④)で弥生時代

後期・古墳時代前期(布留式期古相)の遺構が、また南東部の市教委調査地(⑤)でも弥生時代後期の良好な包含層が検出されている。なお当調査地の西側には、中世末から近世初頭にかけて、一向宗西証寺(現在の顕証寺)を中心に展開した久宝寺寺内町が隣接している。



- 2 -

第2章 調査概要

第1節 調査方法

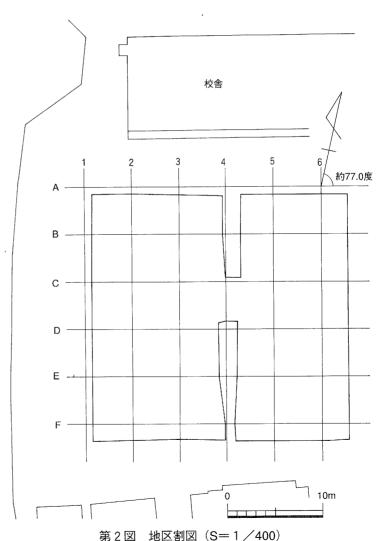
今回の調査は、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第8次調査である。屋内運動場建設 に伴う調査で、建物部分を対象としている。

調査にあたり機械掘削を開始したところ、調査地の中央で南北方向の既設水道管の存在が判明した。協議の結果この撤去が困難なことから、調査地を東区・西区に分割して交互に調査を 実施することになった。そして、人力掘削に際してのベルトコンベアー設置の都合で、調査地 中央で水道管下を掘り抜き、東区と西区を連結させた。なおこの連結部分では、第1次面で曲

物井戸(SE 102)が 検出され、以後はこの 部分を残しての調査と なった。

調査では前述の遺構 確認調査のデータを参 考に、地表下約2.2 m までを機械掘削とし、 以下の約0.5 mを人力 掘削により実施した。

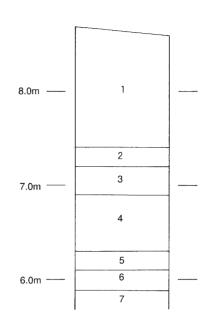
地区割は、調査区平 面形に合わせて5m方 眼を任意に設定した。 そして南北ラインに数 字(西から1~6)、ァ でラインにアルフト(北からA~F)を 起し、地区名は北せた。 なおこの方眼の南西になっている。 13.0度振っている。



第 2 因 地区剖因 (3-1/400)

第2節 基本層序

第1層は盛土、第2層は旧耕土である。 第3層は近世の遺物を含んでおり、床土 と考えられる。第4層は河川の堆積と考 えられ、北西部では暗褐色~灰黄色の砂 層・砂礫層が厚く堆積している。古墳時 代後期以降の遺物を少量含んでいる。第 5層以下はほぼ水平の安定した堆積状況 である。第5層は古墳時代後期頃までの 遺物を含んでおり、さらに細分が可である。この上面が第1次面(標高約6.3m)である。第6層は古墳時代前期までのづきる。この上面が第2次面(標高約6.1m)である。第7層がベース面となり、この 上面が第3次面(標高約5.9 m)である。



- 1. 盛土
- 2. 旧耕土
- 3. 暗青灰色粗砂混じり砂質土
- 4. 青灰色系粘質シルト〜粘土
- 5. 青灰色~灰色粘土
- 6. 暗灰青色粘質シルト
- 7. 緑灰色粘質シルト

第3回 基本層序(S=1/40)

第3節 検出遺構と出土遺物

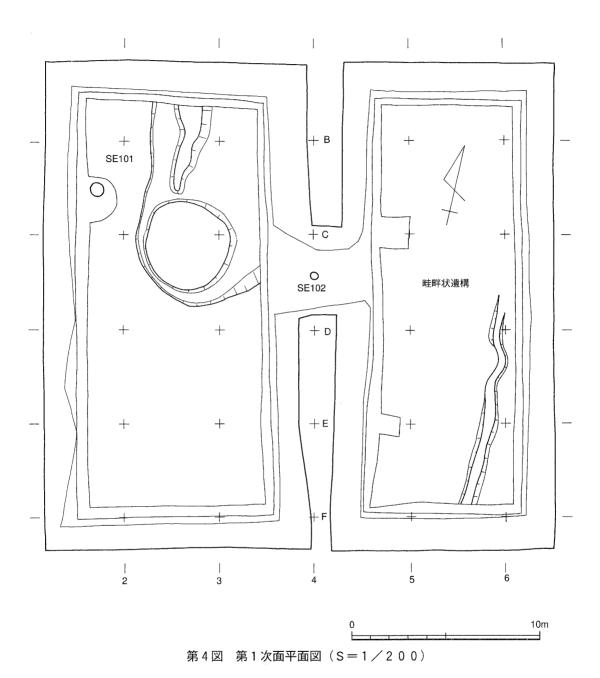
〈第1次面〉

第5層上面で井戸2基(SE101・102)、畦畔状遺構1条を検出した。

この面は第4層の砂層で覆われ、その影響でか北西部は起伏がある。西区中央北部では直径約4.5 mの円形に、高さ10 cm~15 cm程度盛り上がる部分が認められた。その周囲の西部~南部は幅0.4 m~1.0 m・深さ5 cm~10 cmの溝状を呈し、ここには第4層が落ち込んで灰黄色微砂~粘質シルトの互層が堆積している。これらの形状等からこの部分は、削平された小円墳であるという可能性も考えたが、自然に形成されたものかどうか明確には判断できなかった。

S E 101

1 B区に位置する井戸で、第3層上面から掘り込まれている。機械掘削の段階で井戸の東半部を検出したが、調査は実施していない。掘方平面形は直径約2.5mの円形を呈し、井戸枠は



掘方の北寄りに設置されている。井戸枠は直径約70cmを測り、枠構造は上部に井戸枠瓦、下部に桶を使用したものである。近世以降通例にみられる井戸である。

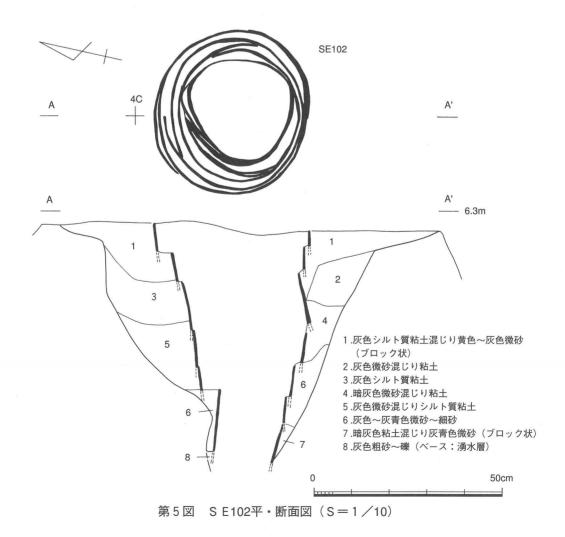
S E102

 $3 \sim 4$ C 区で検出した井戸で、井戸枠には曲物 6 段を使用している。曲物の直径は最下段が約 18cm、最上段が約 42cmを測り、徐々に直径の大きな曲物を積み上げている。最下段が湧

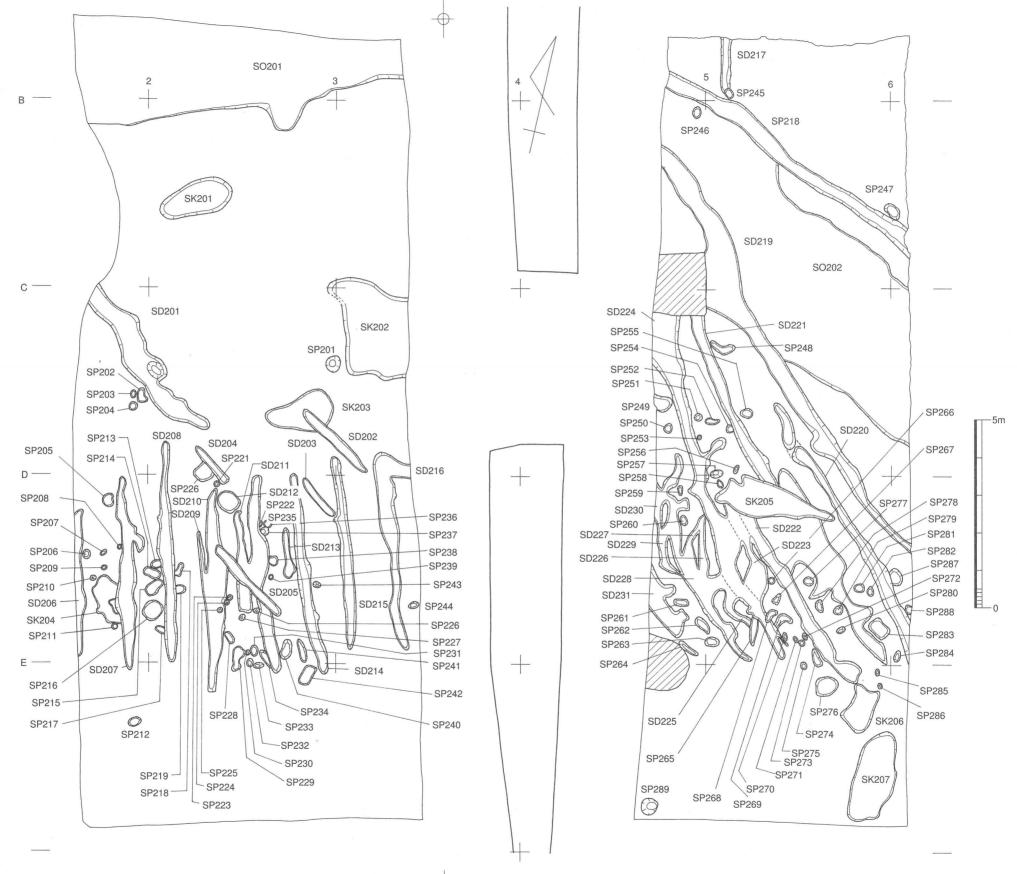
水層に達している。枠内埋土は上から明灰青色粘質シルト・明灰青色細砂混じり粘質シルト・明灰色細砂〜粗砂である。掘方は直径約1.0mの円形で、深さ65cm以上を測り、断面は二段掘りの形状を呈する。掘方埋土はおおまかにみて上から黄色〜灰色微砂(灰色粘土のブロックを含む)・灰色粘土〜粘質シルト・灰色系微砂〜細砂である。遺物は全く出土しておらず、時期は明確にはできないが、中世頃のものであろう。

畦畔状遺構

 $5 \, \mathrm{C} \sim \mathrm{E} \, \mathrm{Z} \, \mathrm{C}$ 夜出した。一部蛇行して南北方向に伸び、検出長約 $11.3 \, \mathrm{m}$ ・上幅約 $50 \, \mathrm{cm}$ ・下幅約 $90 \, \mathrm{cm}$ ・高さ約 $4 \, \mathrm{cm}$ を測る。断面観察によると、盛土されたものではない。 $1 \, \mathrm{\hat{x}}$ のみではあるが水田畦畔である可能性があり、この面全面には砂で埋まった足跡状の窪みも多数認められることからも、第 $1 \, \mathrm{\chi}$ 面は河川により後世に削平された水田面である可能性がある。時期は第 $4 \, \mathrm{E}$ 出土遺物から、古墳時代後期以降に比定できるものである。



- 6 -



第6図 第2次面平面図 (S=1/100) -7·8-

〈第2次面〉

土坑 7 基(S K 201~207)、溝 31条(S D 201~231)、落ち込み 2 基(S O 201・202)、ピット89個(S P 201~289)を検出した。遺構出土遺物は弥生時代後期末から古墳時代前期に比定されるが、これを覆う第 5 層出土遺物より、古墳時代後期頃まで下る遺構とも考えられる。

土坑 (SK)

いずれも浅い落ち込み状を呈するもので、性格等は不明である。S K 202は南北方向の溝群と同様の埋土であり、同時期に機能していたものと考えられる。出土遺物は小片のみで、図化しえるものはなかった。法量等は表1にまとめた。

SK	地区	平面形	法量	深さ	埋 土	遺 物
201	2 B	長円形	199×91	8	暗褐色粘土~粘質シルト	
202	3 C	方 形	169 以上× 213	13	暗灰青色粘土〜粘質シルト	庄内新
203	2 C	不定形	185×106	13	暗褐色粘土〜粘質シルト	V~庄内
204	1 D	不定形	66 以上× 107	8	暗褐色粘土〜粘質シルト	不明
205	5 D	不定形	300×90	7	暗褐色粘質土	
206	5 E	不定形	117×65	21	暗褐色粘質土	庄内?
207	5 E	不定形	257×109	11	暗褐色粘質土	

表 1 第 2 次面土坑 (S K 201~207) 法量表(cm)

溝(SD)

北西-南東方向の溝(SD201~205、218~231)と南北方向の溝(SD206~217)があり、後者の溝は西区で多くみられた。西区では北部と南部は削平されていると考えられ、中央部付近でのみ検出したが、前者が後者を切っている状況を確認した。

前者の溝は70cm~90cm間隔で規則的に平行して並んでいる。途中で二又に分かれるものもあり(SD209・210)、SD216は直角に屈曲している。後者の溝も平行しているが、東区では西部で複雑に絡み合い、また北部で集合しているような状況が窺える。

埋土は前者のうち西区のSD201~205が暗褐色粘土~粘質シルト、東区のSD217~231が暗灰青色粘質シルト~暗灰褐色シルト、後者が暗灰青色粘土~粘質シルトである。

法量等は表2にまとめた。

S 0 201

西区北端で、東西8.7 m以上、南北2.9 m以上にわたって南から北に向かって落ち込んでいる。深さは約34 cmを測る。埋土は暗灰色粘土である。遺物は出土していない。

S 0202

東区、SD218とSD219の間に位置し、両溝には切られている。幅約3.6mの北西-南東方向の溝状を呈する落ち込みで、深さは最大で約18cmを測る浅いものである。断面皿状で、埋土は暗青灰色~暗灰色シルト~粘質シルトである。遺物は出土していない。

SD	地 区	長さ (m)	幅(cm)	深さ(cm)	遺物
201	1 C ~ 2 C	4.74以上	$32 \sim 79$	14	庄内
202	2 C ~ 3 C	2.34	27	12	庄内新(1)
203	2 D	1.29	19	13	庄内
204	2 C	1.28	18	11	不明
205	2 D	2.52	20	11	
206	1 D	3.82以上	29 以上	11	
207	1 D	5.24	$17 \sim 54$	16	庄内新~布留古
208	$2 \stackrel{\frown}{\mathrm{C}} \sim 2 \stackrel{\frown}{\mathrm{D}}$	5.95	$16 \sim 75$	20	不明
209	2 D	1.16	11	7	
210	$2~\mathrm{D}\sim2~\mathrm{E}$	5.51	$22 \sim 71$	13	庄内~布留
211	2 D	2.80	$16 \sim 37$	9	
212	2 D	5.33	$22 \sim 54$	18	V様式
213	2 D	1.47	$15 \sim 36$	10	
214	2 D	5.44	$29 \sim 39$	10	不明
215	3 C ~ 3 D	5.19	24	17	V様式~庄内(2)
216	$3 \text{ C} \sim 3 \text{ D}$	5.34+0.50以上	$20 \sim 52$	19	庄内(3)
217	5 A	1.53以上	24	7	
218	4 A ~ 5 B	8.30以上	$30 \sim 52$	20	
219	$4~\mathrm{B}\sim 6~\mathrm{D}$	12.50以上	15~110以上	21	
220	$5 \text{ C} \sim 6 \text{ D}$	7.60以上	$16 \sim 46$	8	不明
221	$4 \text{ C} \sim 5 \text{ D}$	10.62以上	$20 \sim 147$	15	V様式~庄内
222	5 D ~ 5 E	5.45以上	$17 \sim 52$	10	
223	5 D	2.09以上	$20 \sim 50$	7	
224	$4~\mathrm{C}\sim5~\mathrm{D}$	9.94以上	35~70以上	15	V様式~庄内(4)
225	5 D	1.10	22	6	
226	4 D	1.20	18	5	
227	4 D	1.34	$14 \sim 34$	3	
228	$4~\mathrm{D}\sim5~\mathrm{D}$	5.49以上	$17 \sim 64$	9	
229	4 D	2.00	$10 \sim 30$	6	
230	$4 \text{ C} \sim 4 \text{ D}$	2.17	$12 \sim 36$	10	
231	4 D	2.04以上	45	6	

表 2 第 2 次面溝 (SD 201~231)法量表

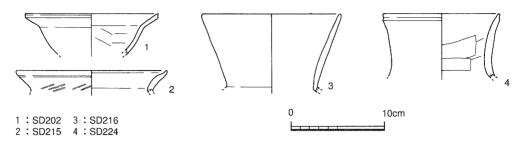
ピット (SP)

主に溝の周辺にみられ、何らかの関連も考えられる。深さ10cm程度の浅いものが多く、また平面不定形なものも多い。建物を構成するような並びは認められなかった。一応ピットとしたが、SP264・265等はその平面形状から溝の残欠であろうと思われる。埋土は①暗灰色粘土~粘質土・②暗褐色粘土~粘質シルト・③暗灰青色粘土~粘質シルトの3種類に分類できる。

出土遺物は少量で、図化しえたものはない。SP276からは根石と考えられる拳大の石が出土している。法量等は表3にまとめた。

SP地区 平面形	法量	深さ	埋土	土器	SP地区 平面形	法 量 深	さ	埋土	土器_
201 2 C 円 形	44×38	33	3		246 4 B 楕円形	38×28	8	1	
202 1 C 不定形	40×22	8	2	不明	247 5 B 不定形	52×27	5	1	
203 1 C 楕円形	21×15	12	2		248 5 C 不定形	67×20	_	1	V 様式
204 1 C 円 形	23×23	10	2	不明	249 4 C 不 明	50×50以上 1	.7	1	
205 1 D 不定形	38×28	8	2	V 様式	250 4 C 円 形	28×24	8	1	
	26×22	12	2		251 4 C 円 形	23×22	0	1	庄内
207 1 D 楕円形	22×14	10	2		252 5 C 不定形	43×15	8	1	
208 1 D 円 形	14×13	10	2		253 4 C 円 形	15×13	7	1	
209 1 D 円 形	17×14	5	2		254 5 C 不 明	16×20以上	8		庄内
210 1 D 楕円形	17×14	9	2		255 5 C 不定形	32×28	6	1	
211 1 D 楕円形	18×18	12	2		256 5 C 不定形	25×13		1	
	35×24			不明	257 5 C 楕円形	38×24		1	
213 2 D 楕円形	19×31以上		2	.1>1	258 5 D 楕円形	28×16		1	
214 2 D 長方形	48×24	6	2		259 4 D 不定形	28×12		1	
215 2 D 不定形	55×29	8	2		260 4 D 楕円形	30×20		1	
			2		261 4 D 不定形	42×18		1	
216 2 D 円 形	56×50				261 4 D 不足形 262 4 D 不定形	53×23	7	1	
217 2 D 不 明	18×27以上		2					1	
218 2 D 不定形	13×36以上		2	H-1-	263 5 D 楕円形	40×25			
219 2 D 不 明	21×29以上			庄内	264 4 D 不定形	60×15		1	
220 2 C 不定形	35×46以上		3		265 5 D 不定形	17×74以上		1	
221 2 D 円 形	18×16	7	3	. 1 1	266 5 D 円 形	22×21	6	1	
222 2 D 不定形	64×61	10		庄内新		30×16	6	1	
223 2 D 円 形	17×17	13	2		268 5 D 不定形		11	1	
224 2 D 円 形	16×15	13	2		269 5 D 不定形	12×44以上	9	1	
225 2 D 楕円形	17×16	6	2		270 5 D 楕円形	23×13	7	1	
226 2 D 楕円形	17×16	11	2		271 5 D 楕円形	19×11	7	1	
227 2 D 円 形	18×18	11	2		272 5 D 楕円形	20×12	6	1	
228 2 D 不定形	38×18	11	2		273 5 D 円 形	19×15	7	1	
229 2 D 不定形	68×19	12	2	庄内	274 5 D 不定形	53×19	6	1	庄内
230 2 D 円 形	14×14	9	2		275 5 D 楕円形	23×17	7		不明
231 2 D 楕円形	31×22	11	2		276 5 E 不定形	60×54	9	1	根石
232 2 D 楕円形	24×18	9	2		277 5 D 円 形	31×27	5	1	
233 2 D 楕円形	27×15	8	2		278 5 D 不定形	35×19	2	1	
234 2 D 不定形	42×40以上	. –	2		279 5 D 不定形	28×27	7	1	
235 2 D 不 明	17×11以上	11	2		280 5 D 楕円形	25×16	8	1	
236 2 D 円 形	23×19	12	2		281 5 D 楕円形	30×24	6	1	
237 2 D 円 形	16×22以上			不明	282 5 D 楕円形	26×18	4	1	
238 2 D 楕円形	26×24以上				283 5 D 長方形	56×37	6	1	
239 2 D 楕円形	16×15	10	_		284 6 D 楕円形	33×19		1	
240 2 D 不定形	55×26	14	_		285 5 E 楕円形	18×13		1	
241 2 D 楕円形	64×20	13	2		286 5 E 円 形	16×13		1	
242 2 E 楕円形	57×33	10			287 6 D 不 明	33×31以上	7	_	
243 2 D 不定形	23×16	11	2			23×18以上	5	1	
		13			289 4 E 不定形		9	1	庄内
245 5 A 不定形		7					-		,
ETO OTI AINEN	J ,	•	٠						

表 3 第 2 次面ピット (SP 201~289)法量表



第7図 第2次面遺構出土遺物 (S=1/4)

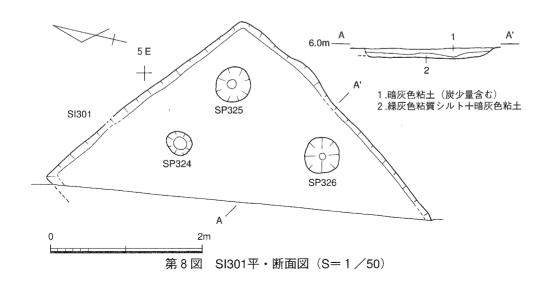
<第3次面>

竪穴住居 1 棟 (SI301)、土坑 5 基 (SK301~305)、溝 39 条 (SD301~339)、ピット 26 個 (SP301~326) を検出した。

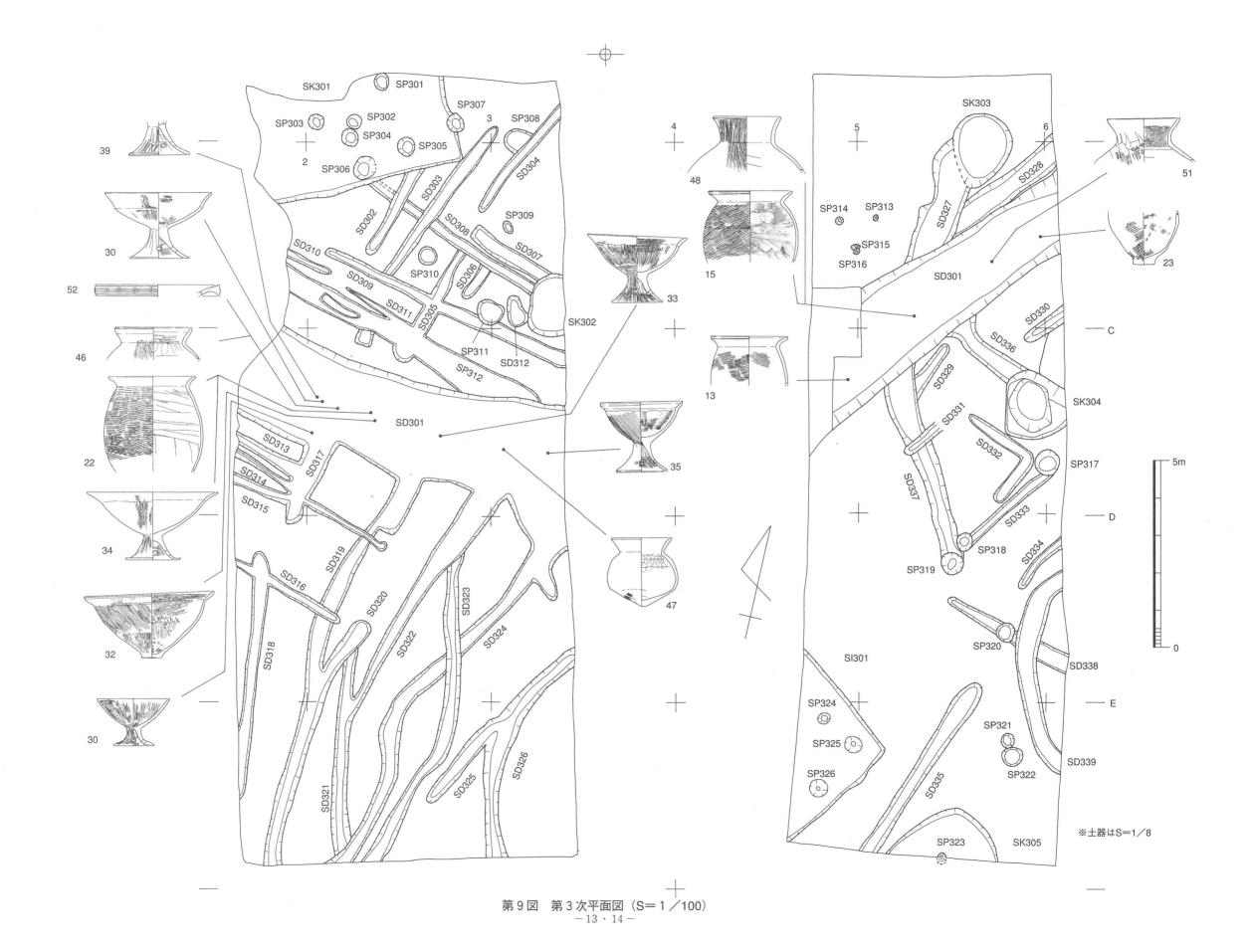
SI301

 $4\sim5$ D~E区で竪穴住居の東側部分を検出した。東西辺約3.3 m、南北辺は3.6 m以上を測り、平面長方形を呈すると考えられ、主軸は北から東に約32 度振っている。深さ約15 cmを測り、埋土は上層が暗灰色粘土(炭少量含む)、下層が緑灰色粘質シルト+暗灰色粘土である。底部では直径31 cm~48 cmを測るピット3 個(SP324~326)が検出され、これらは柱穴となる可能性がある。壁溝は平面及び断面でも認められなかった。

出土遺物には庄内式期新段階頃に比定される土器片があるが、図化できるものはなかった。 なお当竪穴住居の北部は前述の遺構確認調査における南グリッドと重複する位置関係にあ り、この調査の際、二個体の庄内甕が押しつぶされた状況で出土している。2点共に、外面左 上がりの平行タタキ後下半にハケを施すもので、庄内式期新段階に比定されるものである。



-12-



SK301

 $1\sim 2$ A~B区で検出した。平面形は、東西辺 5.2 m以上・南北辺 2.3 m以上を測る方形の角部の様相を呈しており、深さは 5 cm~21 cmを測る。SD302・308を切っている。底部から肩部で直径 40 cm~50 cmのピット 7 個(SP301~307)を検出したが、当土坑は平面形状からみてこれらを柱穴とする方形の竪穴住居である可能性がある。

出土遺物は弥生時代後期末から庄内式期に比定されるが、手焙形土器 (5) の他は小片のみである。5 はほぼ全容が知れる資料で、器高 1 8.3 cm・体部径 1 7.3 mを測る。体部~底部間には刻み目を施した突帯を巡らせ、覆部は口縁部の中位に接合している。調整は外面ナデ、底体部内面ハケで、覆部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。体部~底部間の外面に黒斑を有する。時期は弥生時代後期末に比定される。

SK302

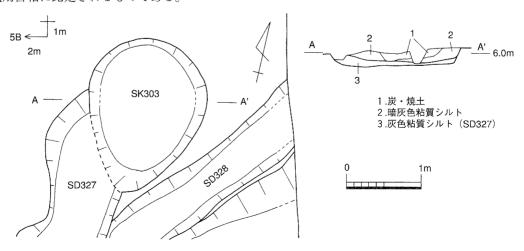
3 B~C区で検出したが、東部は調査区外に続き平面形は不明である。規模は約1.7 m×1.0 m以上、深さ34 cmを測る。SD307・308を切っている。

出土遺物には庄内式期古相~新相の土器があり、図化しえた甕 (6・7) は庄内式期新相に 比定されるものである。

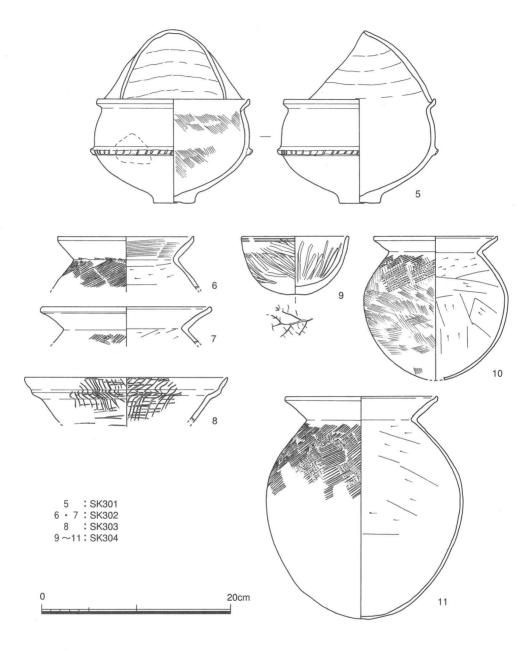
SK303

 $5 \text{ A} \sim \text{B}$ 区に位置し、平面形は南北約 $2.0 \text{ m} \cdot \text{東西約 } 1.6 \text{ m}$ の偏円形を呈している。断面 皿状を呈し、深さ約 27 cm を測り、埋土は上層が炭・焼土層、下層が暗灰色粘質シルトである。南西部で連続している SD327 との関係は明確にはできなかったが、同時に機能していたか、これを切っているようである。

出土遺物には弥生時代後期末から布留式期の少量の土器がある。図化した有段鉢(8)は布留式期古相に比定されるものである。



第10図 SK303平·断面図 (S=1/50)



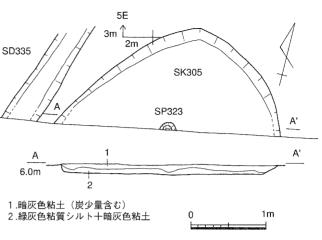
第11図 第3次面遺構出土遺物 (S=1/4)

SK304

 $5\sim6$ C区に位置し、SD336を切っている。平面不定形で、規模は1.6 m以上×1.9 m、深さ 36 cmを測る。遺物は庄内式期新相に比定される土器($9\sim11$)が出土している。鉢(9)は内外面へラミガキで、底部外面には葉脈痕が遺存している。

S K 305

5 E 区で検出され、南は調査区 SD335 外に続いている。規模は一辺 2.0 m以上、深さ約 10 cmを測り、平 面方形のコーナー部とも考えられる。埋土の状況は S I 301と同様である。上面で S P 323が検出されており、これを柱穴とする竪穴住居である可能性がある。出土遺 2.線成物は細片のみであるが、時期は庄内式期と考えられる。



第12図 SK 305平・断面図(S=1/50)

S D 301

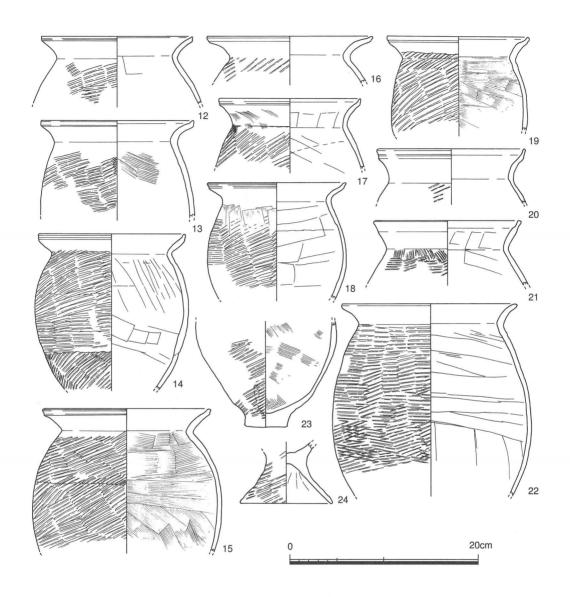
調査区を横断する溝で、西区ではわずかに弧状を呈して東西方向に伸び、調査区中央付近で 屈曲すると考えられ、東区では南西-北東方向に直線的に伸びている。西区ではSD 319・ 322等が接続し、SD312を切っている。東区ではSD327・336等を切っている。

規模は検出長約 $23 \text{ m} \cdot \text{幅} 1.8 \text{ m} \sim 2.6 \text{ m} \cdot$ 深さ $10 \text{ cm} \sim 36 \text{ cm} \varepsilon$ 測り、断面皿状を呈する。 埋土は上層が青灰色粘土混じりシルト、下層が暗灰色粘土混じり細砂である。

土器(12~55)は主に西区から出土している。器種は多岐にわたり、完形品に近いものも数点ある。時期は弥生時代後期末に比定されるものである。これらのうち残存状態の良好な土器の出土状況をみると、溝の中央に等間隔に並べられたような状況で、何らかの祭祀等、意図的なものも想定できる。

甕は口縁端部をつまみあげるものが多くを占め、外反して端部が丸く収まるものは1点である (22)。調整は外面平行タタキで、後に肩部にハケを施すものが2点ある (17・18)。内面はハケ・ナデ・板ナデがあり、ヘラケズリを施すものはない。

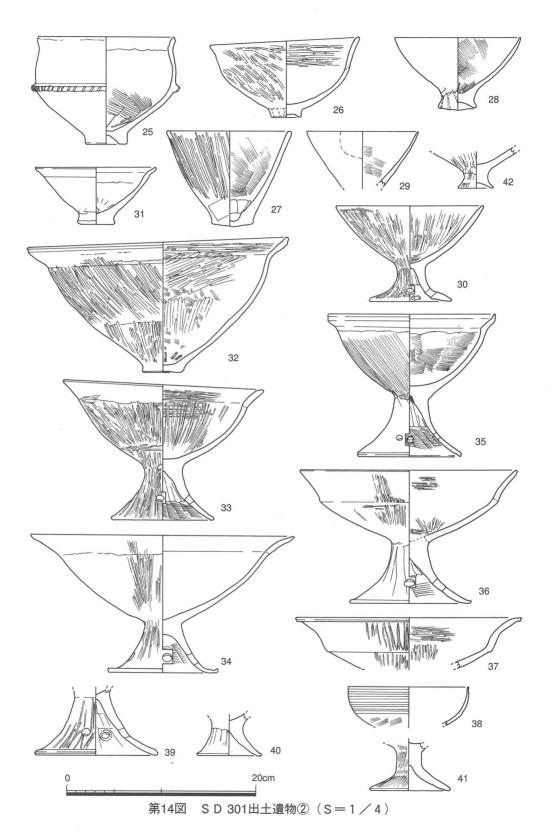
鉢は形態で四種類に分類できる。A:体部から上方に屈曲して口縁部に至るもの(25・26)。B:底部~口縁部が直線的に上外方に伸びるもの(27)。C:体部~口縁部が全体に内湾するもの(28~30)。D:内湾する体部から口縁部が外反するもの(31~35)。Aのうち25は底部~体部間に刻み目を施した突帯を巡らせるもので、形態的に覆部の欠損した手焙形土器である可能性がある。C・Dには台付きのものがあり、いずれも台部に四方向の円孔を有する。Dの口縁端部には、甕と同様つまみあげるもの(32・35)と丸く収まるものがある。38は口縁部外面に横描直線文を施すもので、高杯であろう。40は台付き壷かもしれない。

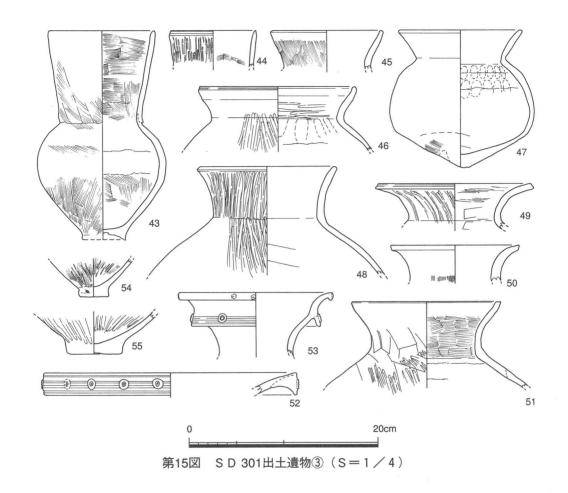


第13図 SD 301出土遺物① (S=1/4)

	西区	東区
甕	12 • 16 • 17 • 19 • 20 • 21 • 22 • 24	13 • 14 • 15 • 18 • 23
鉢	25 • 26 • 27 • 28 • 29 • 30 • 32 • 33 • 34 • 35 • 39 • 40	31
高杯	36 • 38 • 41	37
壷	43 • 44 • 45 • 46 • 47 • 49 • 50 • 52 • 53 • 54 • 55	48 • 51

表 4 S D 301出土土器の出土地点





壷には長頸壷 (43) ・短頸壷 (44~48) ・広口壷 (49~52) ・複合口縁壷 (53) がある。 52・53は口縁部外面に櫛描直線文及び竹管円形浮文を施している。

出土土器の器種構成をみると、台付き鉢の多いことが特徴といえる(30・33~35)。そして 高杯とした36も脚高の低いもので、脚部の形態は他の台付き鉢のものに類似している。また 37も高杯であろうが、この時期の典型的な高杯が少ないということが指摘できよう。このこ とが単なる偶然によるものか、あるいは何らかの背景が存在するのかは不明であるが、意図的 とも思える出土状況とも合わせて検討を要する。なお器種別の出土地点をみると、鉢類・壷類 のほとんどが西区から、甕は均等に出土している。

当溝の東区西端部分は、遺構確認調査の北グリッドと重複する位置関係にあるが、この調査では『地表下約2.6 mで、平面楕円形を呈すると思われる炭化物を多く含む炉状遺構』が検出されている。これは当溝の埋土とは様相が異なり、ここに前記のSK 303と同様の遺構が存在したのかもしれない。

S D 302~339

調査区北西部では、北東-南西方向の溝 (SD302~306)と、これに直交する溝 (SD307~316)があり、南西部では蛇行する溝 (SD317~326)がみられる。

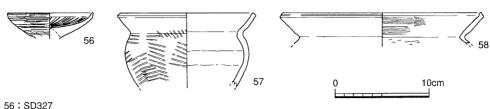
5 C区に位置する S D 332は、ほぼ直角に屈曲している。また隣接する S D 333の両端には ピット (S P 317・318) が位置している。この状況から、これらの遺構は竪穴住居の残欠で ある可能性がある。また弧状を呈する S D 339も竪穴住居の壁溝かもしれない。

SD327とSD337は連続すると考えられる。各溝の法量等は表5にまとめた。

出土遺物のうち図化できたのはSD327からの小型器台(56)、SD332からのV様式系小型 甕(57)である。56は庄内式期新相~布留式期古相に比定されるものである。

SD 地区 長さ(m) 幅(cm) 深さ(cm)	遺物
301 1 C \sim 6 B 23.00 180 \sim 260 36	V 様式
302 2 B 2.48 27 10	
303 2 B ~ 3 A 4.98 37 11	
304 $2 B \sim 3 A$ 3.47 27 8	
305 2 B \sim 2 C 2.50 23 \sim 47 18	
306 2 B 1.01 28 9	不明
307 2 B ~ 3 B 2.27 35 11	庄内
308 2 B ~ 3 B 5.13 28 8	V様式~庄内
309 2 B ~ 3 C 7.09 33 12	V様式
310 1 B ~ 2 B 1.29 17 8	
311 2 B 1.47 13 5	
312 1 B \sim 3 C 7.75 5 7 \sim 8 6 8	V様式~庄内
313 1 C 1.95 31 13	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
314 1 C 1.75 $14 \sim 24$ 9	
315 1 $C \sim 2 D$ 4.58 24 8	
316 1 D ~ 2 D 3.23 25 8	
317 1 D \sim 2 C 2.27 62 13	
318 1 D ~ 1 E 6.62 30 13	
319 1 E \sim 2 C 11.00 26 \sim 65 15	
320 2 D 1.76 41 15	
321 2 D ~ 2 E 5.56 35 19	
322 2 E \sim 3 C 6.82 22 \sim 79 10	
323 2 D ~ 2 E 8.60 36 17	
324 2 E \sim 3 D 10.10 44 17	
325 2 E 2.58 39 13	
326 2 E \sim 3 D 6.05 38 \sim 64 18	
327 5 B 2.90 83 33	庄内新、(56)
328 5 B ~ 6 B 3.60 61 20	
329 5 C 1.44 31 8	
330 5 C \sim 6 B 1.37 35 7	
331 5 C 1.22 28 7	
332 5 C 1.96+1.45 35 7	V 様式~庄内、(57)
333 5 D \sim 6 C 2.55 24 7	V様式
334 5 D \sim 6 D 1.80 18 6	
335 5 D \sim 5 E 5.48 40 12	庄内新
336 5 B ~ 5 C 1.99 51 24	
337 5 $C \sim 5 D$ 5.15 53 6	V様式~庄内
338 5 D \sim 6 D 3.68 39 9	
339 6 D ~ 6 E 5.45 52 6	

表 5 第 3 次面溝 (SD 301~339) 法量表



56: SD327 57: SD332 58: SP317

第16図 第3次面遺構出土遺物②(S=1/4)

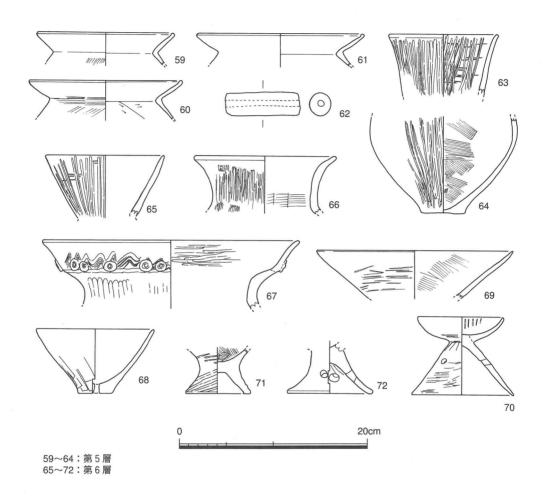
ピット (SP)

竪穴住居に伴うと考えられるもの以外は密度が低く、第2次面とは様相が異なるといえる。 調査区の南西部、つまり西区のSD301南側の蛇行する溝群(SD317~326)周辺では全くみ られない。各ピットの法量等は表6にまとめた。

出土遺物は少量で、図化しえたのは S P 317からの庄内甕 (58) 1点のみである。庄内式期 新相に比定されよう。

SP	地区	平面形	法量	深さ	遺物
301	2 A	楕円形	47×41以上	13	
302	2 A	円 形	43×42	35	
303	2 A	円 形	44×43	16	
304	2 A	円 形	51×44	41	
305	2 B	円 形	51×46	29	
306	2 B	楕円形	45×54以上	27	
307	2 A	楕円形	51×43	24	
308	3 A	不 明	72 × 48 以上	13	
309	3 B	楕円形	37×25	17	
310	2 B	楕円形	53×50	31	
311	2 B	不定形	72×71	12	
312	3 B	不定形	86×46	9	
313	5 B	円 形	17×16	9	
314	4 B	円 形	24×23	9	
315	4 B	楕円形	26 × 24 以上	11	不明
316	4 B	,円 形	17×16	9	
317	5 C	円 形	67×66	25	庄内(58)
318	5 D	円 形	49×41	7	
319	5 D	円 形	61×59	12	
320	5 D	円 形	50×47	43	庄内
321	5 E	円 形	40×33	7	
322	5 E	円 形	54×53	10	
323	5 E	不 明	22×10以上	10	
324	4 E	楕円形	35×31	11	
325	4 E	円 形	47×46	21	
326	4 E	円 形	48×48	14	

表 6 第 3 次面ピット (S P 301~326) 法量表 (cm)



第17図 第5・6層出土遺物 (S=1/4)

包含層出土遺物

第2次面を覆う第5層からは弥生時代後期末~古墳時代後期頃、第3次面を覆う第6層からは弥生時代後期末~古墳時代前期(布留式期古相)の土器が出土している。第5層の古墳時代後期のものは少ない。図化しえたものは第5層:59~64、第6層:65~72である。

63は長頸壷口縁部で、底体部の64は色調・胎土等からこれと同一個体と思われる。複合口 縁壷 (67) は、口縁部外面に櫛描波状文のち竹管円形浮文を施す。

第3章 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) 口径 (復元値) 器高	色調 外	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	備 考 残 存
1	弥 生		(14.2)		密		口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	反転
		S D 202		茶橙色	$0.5 \sim 1.5 \mathrm{mm}$	良好	· ·	
	鉢				の砂粒含む			1/4
2	弥 生		(16.1)	褐橙色	密		口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。体部外面タタ	反転
		S D 215			0.5 ~ 2.0 mm	良好	牛。	
	速			茶橙色	の砂粒含む			極小
3	土師器	0.00.00	(15.0)	淡赤灰色	密	やや	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。	反転
	壷	S D 216		淡灰赤色	0.5~4.0 mm の砂粒含む	不良		口縁 1 / 2
4	弥 生		(12.4)	极风亦已	密	良好	口縁部外面~端部ヨコナデ、内面ナデ。	反転
-	JA 12	S D 224	(12.4)	灰褐色	0.5 ~ 3.0 mm	16.81	Distribution Similar Control of C	2244
	壷	02221) (II) G	の砂粒含む			極小
5	弥 生		(16.3)			良好	覆部ナデ。□縁部~体部外面ヨコナデ。底部外	一部反転
		S K 301	18.4	黄茶色	やや粗		面ナデ。体部~底部内面ナデ。	
7	手焙形土器		底径 4.4				体部最大径 (17.4)	2/3
6	土師器		(14.7)		審	良好	口縁部外面~端部ヨコナデ、内面ハケ。肩部外	反転
		S K 302		灰褐色	$0.5\sim 2.0\mathrm{mm}$		面タタキ後ハケ、内面ヘラケズリ。外面煤付着。	
7	甕				の砂粒含む			極小
7	土師器		(18.4)	黒褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面タタキ後ハケ、内面	反転
		S K 302			$0.5\sim2.0\mathrm{mm}$		ヘラケズリ。外面煤付着。	
	甕			褐灰色	の砂粒含む			極小
8	土師器		(21.8)	淡灰橙色	密	良好	内外面ヨコ後タテ方向ヘラミガキ。	反転
		S K 303			0.5 mm以下の			
	鉢		(11.0)	淡茶橙色	砂粒含む	2.17	Harry Colored Land Land	極小
9	土師器	0.17.004	(11.6)	NP 122 49 A	密	良好	体部ナデ、口縁部ヨコナデ後、内外面ヘラミガ	一部反転
7	鉢	S K 304	6.2	淡灰橙色	0.5~1.5mm の砂粒含む		キ。底部外面に葉脈痕。	1 /0
10	土師器		(13.4)		の砂粒音む	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面タタキ後ハケ。底体	1/2 反転
10		S K 304	(13.4)	暗茶色	密	IRM)	部外面ハケ後底部外面ナデ。内面へラケズリ。	1久44
7	薬	511 504	体部径(15.5)	相水口	ш		Thought to leave the last the same of the	1/2
11	土師器		16.4		密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面上半タタキ後ハケ、	一部反転
		S K 304	23.6	暗褐灰色	0.5 ~ 1.0 mm		下半ナデ。内面ヘラケズリ。外面煤付着。	
7	甕		体部径 21.1		の砂粒含む			4/5
12	弥 生		(16.2)		密	やや	口縁部ナデ。体部外面タタキ。内面ナデ。	反転
		S D 301		暗灰褐色	$0.5\sim2.0\mathrm{mm}$	不良		
	甕				の砂粒含む			極小
13	弥 生		16.4			良好	口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ、内面ナデ。	一部反転
		S D 301		淡灰茶色	やや粗			
	甕							1/3
14	弥 生	0.000	(15.7)	ET W. fr	A A ME	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ、内面ナデ。	反転
7	rgtas	S D 301	(H-10/42 / 3.0 ·)	灰茶色	やや粗		口緣部~体部外面媒付着。	1 (0
7 15	変 弥 生		体部径(16.4)			良好	口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ、内面ハケ。	1/2
15	700 年	S D 301	17.9	淡黄茶色	やや粗	及灯	山林市ココナナ。 本部外回ラライ、 竹画バケ。	一即汉枢
8	甕	זטנענ	体部径(20.1)	伙员常巴	1 1/201.			口縁1/2
16	弥 生		(17.8)			良好	口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ、内面ナデ。	反転
		S D 301		暗茶色	やや粗			
	甕						/	口繰1/4
17	弥 生		(15.2)		密	良好	口縁部ヨコナデ、体部外而タタキ後、口縁部~	反転
		S D 301		淡橙灰色	$0.5\sim 2.0\mathrm{mm}$		体部外面ハケ。体部内面ナデ。	
8	燛				の砂粒含む			極小
18	弥 生		(14.8)			良好	口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ後、肩部板ナ	反転
		S D 301		淡乳茶色	密		デ。体部内面ナデ。	
	滥							1/6

遺物番号 図版番号	器 種	出土地点	法量(cm) 口径 (復元值) 器高	色調外内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	備 考 残 存
19	弥 生	S D 301	15.3	橙茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ、内面ハケ。 外面煤付着。	一部反転
8	36							2/3
20	弥 生	S D 301	(16.0)	灰橙色	密 0.5~1.5 mm	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ後ヨコナデ。 体部内面ナデ。	反転
	発				の砂粒含む			極小
21	弥 生		(15.9)		密		口縁部外面~端部ヨコナデ。肩部外面タタキ、	反転
	甕	S D 301		茶橙色	0.5 ~ 2.5 mm の砂粒含む	良好	内面ナデ。	極小
22	弥 生	S D 301	18.7	淡灰茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ、内面板ナデ。 外面煤付着。	一部反転
8	甕		体部径 21.1					口縁1/2
23	弥 生				密		体部外面タタキ、内面ハケ。底部外面ナデ。	一部反転
	甕	S D 301	底径 4.6 体部径(15.0)	暗灰褐色	0.5~1.0 mm の砂粒含む	良好		体部1/3
24	弥 生		11 11 (2010)		密		台脚部外面タタキ、内面ナデ。底部内面ナデ。	H-HbI/ O
8	台付甕	S D 301	底径 9.9	橙灰色	0.5 ~ 1.0 mm の砂粒含む	良好	Deathstan > 1 (Lim) \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	極小
25	弥 生		(14.3)		小沙拉马也		口经朝,伏如从西海南上之一度加州西上之一也	. \$7 EF 85
		S D 301	11.4	黄茶色	密	良好	口縁部〜体部外面ヨコナデ。底部外面ナデ、内 面ハケ。手焙形土器である可能性がある。	一部反転
8	鉢		底径 4.5					1/3
26	弥 生	S D 301	16.0 8.1	淡乳茶色	密	良好	外面〜口縁部内面へラミガキ。底部外面ユビオ サエ。	
8	鉢		底径 3.2					ほぼ完形
27	弥 生	S D 301	13.3	茶橙色	密 0.5 ~ 1.0 mm	良好	口縁部~体部外面へラミガキ、内面ハケ。底部 ナデ。	
8	鉢		底径 4.6		の砂粒含む			ほぼ完形
28	弥 生	S D 301	(13.4)	茶灰色	密 0.5~1.0 mm	良好	内面ハケ。口縁部外面ナデ。体部外面下位に工 具痕。底部外面ユビオサエ。底面ナデ。	一部反転
9	鉢		底径 4.1		の砂粒含む			1/2
29	弥 生		(11.8)		密		外面ナデ。内面ハケ。口縁部外面黒斑。	反転
	鉢	S D 301		淡灰茶色	0.5 ~ 1.0 mm の砂粒含む	良好		極小
30	弥 生		(15.6)				口縁部端部ヨコナデ。鉢部ヘラミガキ。脚部外	一部反転
9	台付鉢	S D 301	10.1 底径 8.8	乳茶色	密	良好	面へラミガキ、内面しばり目。脚端部ヨコナデ。 脚部四方孔。	3/4
31			12.9				内外面ナデ。	07 1
9	鉢	S D 301	6.1	暗灰茶色	密	良好	777 ma 7 7 6	2/3
32	弥 生		27.8				口侵却以高、地がコラムコ、中国へらこばと	
9	<i>亦</i> 上	S D 301	13.8	乳茶色	密	良好	口縁部外面〜端部ヨコナデ、内面へラミガキ。 体部へラミガキで、内面ハケ残る。黒斑あり。	4/5
33			底径 4.4				四级数据表 典数与一1 50 中军 - 5 5 5 5 5	4p +-
33	9小 生	S D 301	21.3	暗黄茶色	密	良好	口縁部外面〜端部ヨコナデ、内面へラミガキ。 体部へラミガキで、外面ハケ残る。脚部外面ハ	一部反転
9	台付鉢	0 0 0 0 1	底径 10.8	四风水口	ш	1831	ケ後ヘラミガキ。内面下位ハケ、脚部四方孔。	2/3
34	弥 生		(28.0)				鉢部外面へラミガキ。脚部外面へラミガキ、内	一部反転
9	台付鉢	S D 301	14.5	赤茶色	やや密	良好	面ハケで、裾部ヨコナデ。脚部四方孔。	
35			底径 11.7		162		一位是第一个中心上面 (A) 60 (1) 12 (10 A) 12 (10 A)	2/3
	弥 生	S D 301	(17.8)	淡茶灰色	密 0.5~1.5 mm	良好	口縁部ヨコナデ。体部ハケ。脚部外面ナデ。内 面上位しばり目、下位ハケ。裾部ヨコナデ。脚	一部反転
9	台付鉢		底径 11.0		の砂粒含む		部四方孔。	ほぼ完形
36	弥 生	S D 301	(23.0)	灰茶色	密	良好	杯部ヘラミガキ。脚部外面板ナデ、内面上位ナ デ、下位ハケ。裾部ヨコナデ。脚部四方孔。	一部反転
9	高 杯		12.8				1	2/3

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) 口径 (復元値) 器高	色調 外内	胎 土	燒成	技法・形態等の特徴	備考残存
37	弥 生		(23.9)				杯部ヘラミガキ	反 転
		S D 301		茶褐色	密	良好		
	高杯		(10.0)	A	eth		口縁部外面上位櫛描直線文、下位ハケ、内面ナ	口縁1/8 反 転
38	弥 生	C D 201	(12.8)	茶灰色	密 0.5~1.0 mm	良好	口稼部外国土位博福直線又、下位ハケ、内国デデデ。	八 和
9	高杯	S D 301		暗灰茶色	0.5~1.0 mm	及灯	, ,	1/6
39	弥生			THOUSE CO.	密		脚部外面ヘラミガキ、内面ナデ。脚部四方孔。	
		S D 301		茶橙色	$0.5\sim1.5\mathrm{mm}$	良好		脚部ほぼ
9	脚部		底径 13.1		の砂粒含む			完形
40	弥 生						脚部外面ヘラミガキ、内面ナデ。裾部ヨコナデ。	一部反転
		S D 301		茶色	やや粗	良好		14m **** 0 . (0
9	脚部		底径 (7.0)				期が月売いた。中売よる	脚部 2 / 3 一部反転
41	弥 生	S D 301		淡乳茶色	やや粗	良好	脚部外面ハケ。内面ナデ。	一即汉料
9	脚部	2 D 201	底径 (8.6)	秋和米 巴	1 1 120	12/3/1		脚部1/4
42	弥 生		ALIE (0.07				外面へラミガキ、内面ナデ。	一部反転
		S D 301		灰褐色	密	良好		
9	鉢		底径 (3.8)					脚部1/2
43	弥 生		(11.4)				口縁端部ヨコナデ。口頸部ハケ後外面上位ナデ。	一部反転
		S D 301	22.3	乳黄茶色	密	良好	体部ハケ後内面上位ナデ。	0.70
10	長頸壺		底径 4.6				体部最大径(13.6) 口縁部外面ヘラミガキ、端部~内面ヨコナデ、	2/3
44	弥 生	S D 301	(9.0)	淡灰褐色	密	良好	口稼が外面へフミカギ、蝙部〜内面ココテク、 内面下位ハケ。	/X #A
	短頸壺	3 1/301		DOM NO	1111	1881	L 3 m 1 (75 . 1 %)	口線 1 / 4
45	弥 生		(12.0)				口縁部外面ハケ、端部~内面ヨコナデ、内面下	反 転
	., _	S D 301		乳茶色	やや粗	良好	位ナデ。	
	短頸壺							口縁1/4
46	弥 生		(16.8)		密		口縁部外面~端部ヨコナデ、内面ヘラミガキ。	反 転
		S D 301		淡灰茶色		良好	体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。	town 1
	短頸壺		(10.1)		の砂粒含む	-		極小
47	弥 生	S D 301	(13.1)	1	密 0.5~2.0 mm	良好	□縁部ヨコナデ。体部外面上位ナデ、下位ハケ、 内面上位ユビオサエ、下位ナデ。体部外面黒斑。	
10	短頸壺	3 D 301	14.7	IXXXX E	の砂粒含む	LEXI	1 Juni Time Ca A - A Line A A Hara Haraman	1/2
48	弥生		14.9		密		外面ヘラミガキ、内面ナデ。	一部反転
		S D 301		褐灰色	$0.5\sim3.0\mathrm{mm}$	良好		
	短頸壺				の砂粒含む			1/3
49	弥 生		(16.8)		密		口縁部ヘラミガキ。	反転
		S D 301		淡茶灰色		良好		
	広口壺		(10.0)		の砂粒含む		口縁部ヨコナデで、外面下位ハケ。	口級 7 / 8 反 転
50	弥 生	S D 301	(13.6)	乳茶色	やや粗	良好	口移部ヨコアテで、外間下近バク。	/X 444
	広口壺	3 D 301		40% C	V V 410.	TGAJ		口縁1/4
51	弥 生		(15.7)			+	口縁端部ヨコナデ。口縁部外面板ナデ、内面ハ	反 転
		S D 301		黄茶色	審	良好	ケ。肩部外面板ナデ後ヘラミガキ、内面ナデ。	
10	広口壺							口縁1/3
52	弥 生		(26.9)	1	密		口縁端部櫛描直線文後竹管円形浮文。口縁部ヨ	反転
		S D 301		灰褐色	0.5 ~ 2.0 mm	良好	コナデ。	- 1. Sat
10	広口壺		(16.9)	-	の砂粒含む	-	ナデ。口縁端部竹管円形浮文。口縁垂下部外面	極小反転
53	弥 生	S D 301	(16.3)	暗茶色	やや粗	良好	一	A# A4
10	複合口緑壺	30301		HE VICE	V V 7.00	TCVI	PF-94 E-490 A-12 D-1 222 13 A-0	極小
54	弥 生					-	体部ヘラミガキで、外面ハケ残る。	一部反転
		S D 301		黄茶色	密	良好		
	藍		底径 3.2					底部完存

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) 口径 (復元値) 器高	色調 外内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	備考残存
55	弥 生						体部ヘラミガキ。底部外面ナデ。	一部反転
		S D 301		暗乳茶色	やや粗	良好		
	壺		底径 5.9					底部完存
56	土師器		(9.2)				杯部外面ヘラミガキで下位にヘラケズリ残る。	一部反転
		S D 327		乳茶色	密	良好	内面ヘラミガキ。口縁端部内面ヨコナデ。	
	器台							杯部1/2
57	弥 生		(14.7)				口縁部ヨコナデ。体部外面ヨコナデ、内面ナデ。	反転
		S D 332		暗灰茶色	やや粗	良好		
	变							口縁 1 / 4
58	土師器		(21.7)		密		口縁部外面〜端部ヨコナデ、内面ハケ。頸部外	反 転
		S D 317		暗黒褐色	0.5 ~ 2.0 mm	良好	面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。	are t
	薨		(11.0)		の砂粒含む			極小
59	土師器	西区	(14.8)			4.17	口縁部ヨコナデ。肩部外面ハケ、内面ナデ。	反 転
				灰褐色	密	良好		E165 1 / 4
60	変	第5層	(16.5)				四码如马马上至 随如从市区屋 管如房面开发	口線1/4 反 転
60	土師器	西区	(16.5)	mort-Mr. Zz.		ъ 4.7	口縁部ヨコナデ。頸部外面ハケ。肩部外面タタ	/X \$45
	जो <i>स</i>	第5層		暗茶色	密	良好	キ、内面へラケズリ。 	極小
6.1	売 土師器	西区	(18.0)				口縁部ヨコナデ。肩部内面ナデ。	反転
61	L.MI) 168		(18.0)	暗茶色	密	良好	口塚印ココナナ。 周 印内田ナナ。	/X #A
	甕	第5層		唱示巴	ш	及刈		口縁1/8
62	弥 生	西区			審		ナデ。	μη ₃ (1) 0
02	W -1		長辺 8.0	淡灰茶色	0.5 ~ 1.0 mm	良好	, , ,	
10	土錘	第5層	短辺 2.5	DOD ON C	の砂粒含む	200		完 形
63	弥 生	西区	(11.8)	暗褐色	密		口縁部外面ハケ後ヘラミガキ。内面ヨコ後タテ	反転
					$0.5 \sim 2.0 \text{mm}$	良好	のヘラミガキ。	
	長頸壺	第5層		淡茶灰色	の砂粒含む		64と同一個体	1/5
64	弥 生	西区	体部最大径	暗褐色	密		体部外面へラミガキ、内面ハケ。	一部反転
			(15.8)		$0.5\sim2.0\mathrm{mm}$	良好		
	壺	第5層	底径 4.8	淡茶灰色	の砂粒含む		63と同一個体	1/5
65	土師器	東区	(12.8)		密	やや	口縁部外面ヨコ後タテのヘラミガキ。	一部反転
				淡橙茶色	$0.5\sim2.0\mathrm{mm}$	不良		口縁ほぼ
	藍	第6層			の砂粒含む			完存
66	弥 生	東区	(15.3)				口縁端部~内面上位ヨコナデ。口縁部外面へラ	反 転
				灰茶色	やや粗	良好	ミガキ、内面下位ハケ。	
	壶	第6層						口縁1/6
67	土師器	東区	(27.6)				口縁部外面波状文後竹管円形浮文、内面ヘラミ	反転
				乳茶色	やや粗	良好	ガキ。頸部外面ヘラミガキ、内面ナデ。	
10	複合口縁壺							口縁1/8
68	弥 生	西区	(12.6)	valorate AID da	密	4.17	外面板ナデ、内面ナデ。底面ナデ。底部に焼成	一部反転
	-t-71 AL	Mr. a 🖂	6.8	暗茶褐色	0.5 ~ 2.5 mm	良好	前の穿孔。	1 / 2
10	有孔鉢	第6層	底径 3.8		の砂粒含む		中級が反策。こうばと 内帯 いん依上型	1/3
69	土師器	東区	(21.0)	次型サク	sibs	占 4.7	口縁部外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ。	反転
	-t- +++	第6層		淡乳茶色	密	良好		口級 1 / 4
70	高 杯 土師器	東区	(9.1)	1			杯部ヘラミガキ。脚部外面ヘラミガキ、内面ナ	一部反転
10	上印色	* E	8.3	乳茶色	審	良好	デ。脚部三方孔。	HP2~794
10	器台	第6層	底径 (10.9)	10/10/10		الانكدا	> 0 %1 NP>77 100	3/4
71	弥 生	東区	2411 (10.57				体部外面タタキ、内面ハケ。脚台部外面タタキ、	一部反転
'1				茶褐色	密	良好	内面ナデ。	
10	台付甕	第6層	底径 7.0					底部1/2
72	弥 生	西区	1		密		脚部ナデ。裾部ヨコナデ。脚部四方孔	一部反転
				茶灰色	0.5 ~ 1.0 mm	良好		
10	脚部	第6層	底径 (9.2)		の砂粒含む			脚部1/2
	The 110	オワリョ	/SN DC (3.4)		-> N242 ET U			OT HE A

第4章 まとめ

今回の調査では、弥生時代後期末から近世の遺構・遺物を検出した。弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構は非常に密度の高いものであり、調査を行った2面中に少なくとも3時期の遺構の切り合い関係が確認できる。

弥生時代後期末では、溝SD301から多量の土器が出土しており、完形に近いものも含まれている。このことからも、この時期の居住域が当調査区周辺に存在することが予想されよう。この北側で検出された同時期のSK301を竪穴住居と考えるならば、SD301の北側に当該期の居住域が広がる可能性がある。なおSD301の遺物出土状況は、意図的とも捉えられるもので検討を要する。また当調査地の南西約350mで確認されている集落域との関係が注目される。ちなみに北西約600mの久宝寺遺跡北地区調査地は、当該期の集落域からははずれていると考えられている。

古墳時代前期では竪穴住居 S I 301が検出され、当地が庄内式期新相の居住域であることが確認できた。第2・3次面で検出された溝群は耕作溝と考えられるものである。第2次面の時期については古墳時代後期頃の可能性があるものの、明確にはしえなかった。西約1kmの久室寺遺跡南地区において検出された庄内式期の『多数の交錯する溝』は『畑状遺構』として捉えられている。今回検出の溝群にも共通する点があり、同様の性格の遺構かもしれない。また第1次面では曲物井戸 S E 102や近世井戸 S E 101が検出されており、古墳時代後期~中世以降は、当地は生産域となっていた可能性が高い。

なお今回の調査地は、中世末以降発展する久宝寺寺内町の東端に位置し、その成立段階における環濠部分に想定される地点であったが、これに関する遺構等の検出はなかった。

註

- 註1 金光正裕・他 1987 『河内平野遺跡群の動態 I』 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 註2 消 斎 1991 「6.久宝寺遺跡 (90-11) の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書II』八尾市教育委員会
- 註 3 駒沢 敦 1988 [23.久宝寺遺跡 (第 2 次調査)] 『八尾市文化財調査研究会年報 昭和 62年度』財団法人八尾市文 化財調査研究会
- 註4 西村公助 1989 「6.久宝寺遺跡(第3次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』財団法人八尾市文化 財調査研究会
- 註 5 本書掲載「Ⅱ久宝寺遺跡(第17次調査)」
- 註 6 渞 斎 1992「1.久宝寺遺跡(90-566)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会
- 註7 前掲書 註2
- 註8 前掲書 註5 · 6
- 註9 前掲書 註1
- 註10 松岡良憲・他 1987『久宝寺南 (その1)』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 註11 八尾市教育委員会『寺内町の基本計画に関する研究』昭和63年

図 版



西区 第1次面(北から)



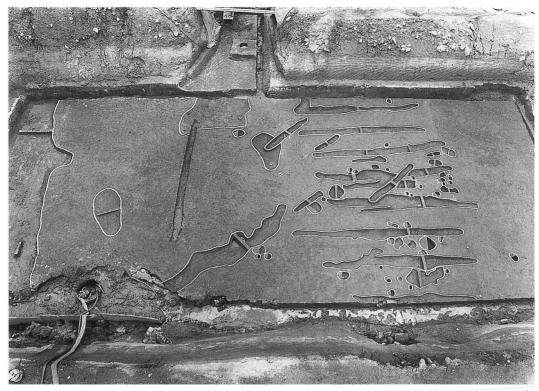
東区 第1次面(北から)



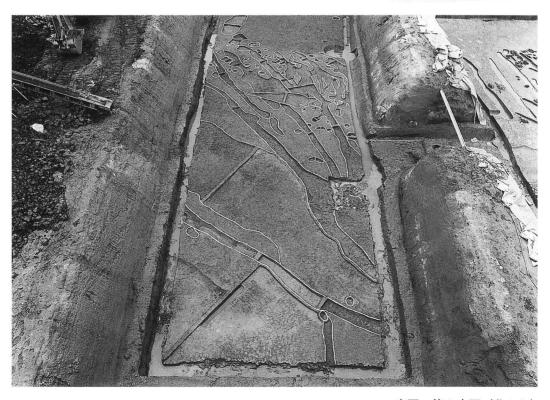
S E 102曲物(上が東)



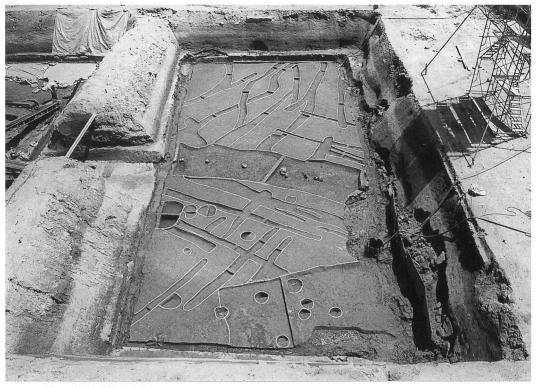
SE102断割り(西から)



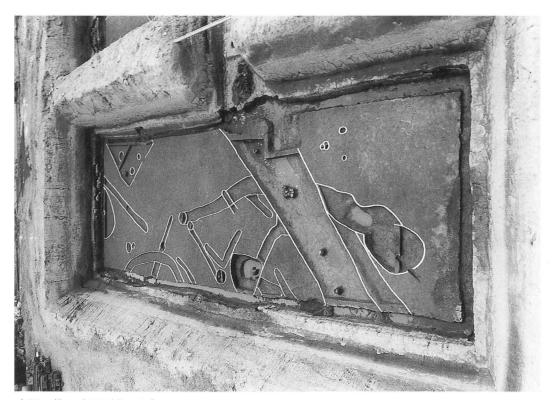
西区 第2次面(西から)



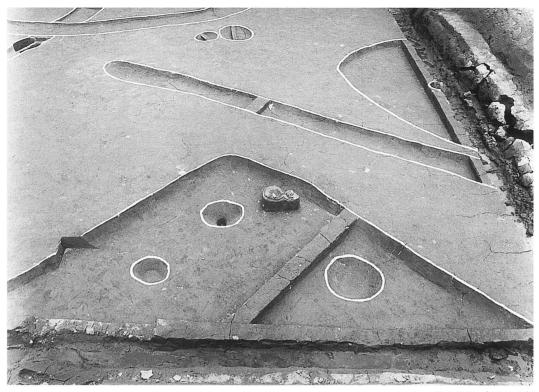
東区 第2次面(北から)



西区 第3次面(北から)



東区 第3次面(北から)



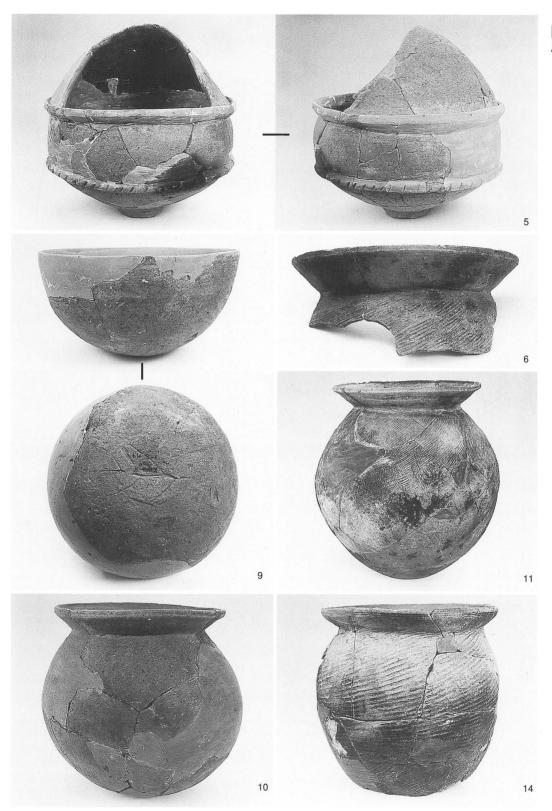
SI301(西から)



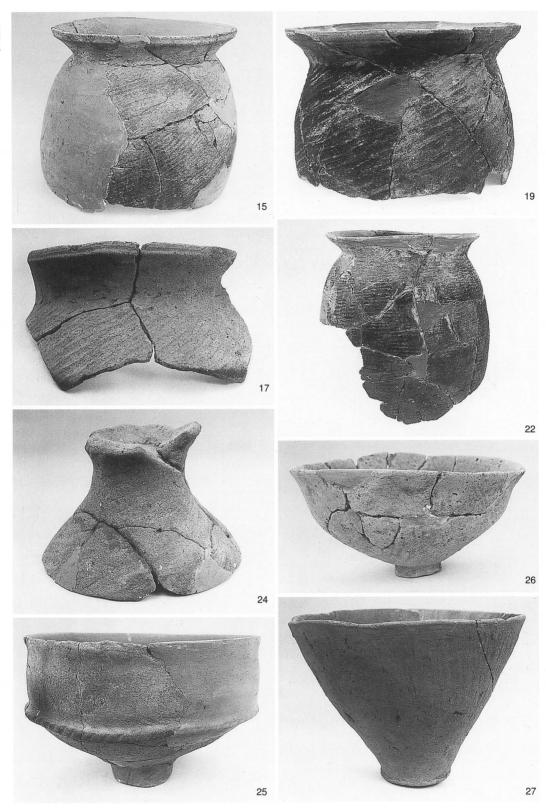
SD301東半(北東から)



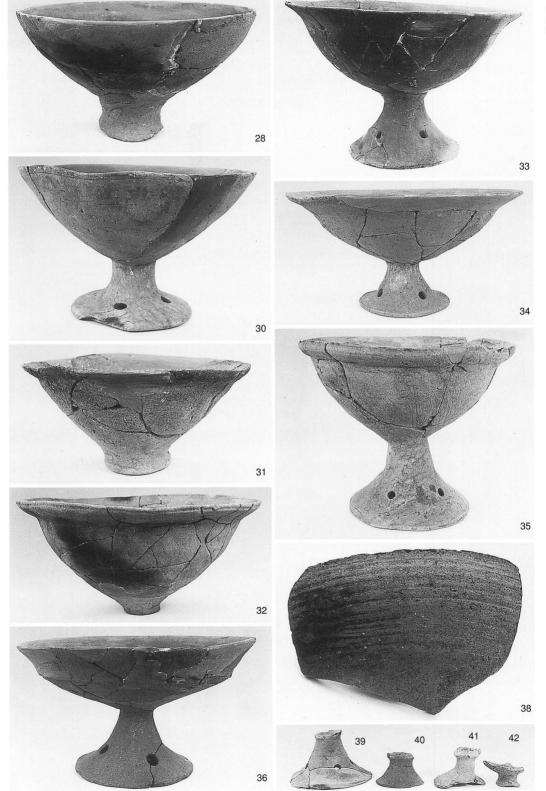
SD301西半(西から)



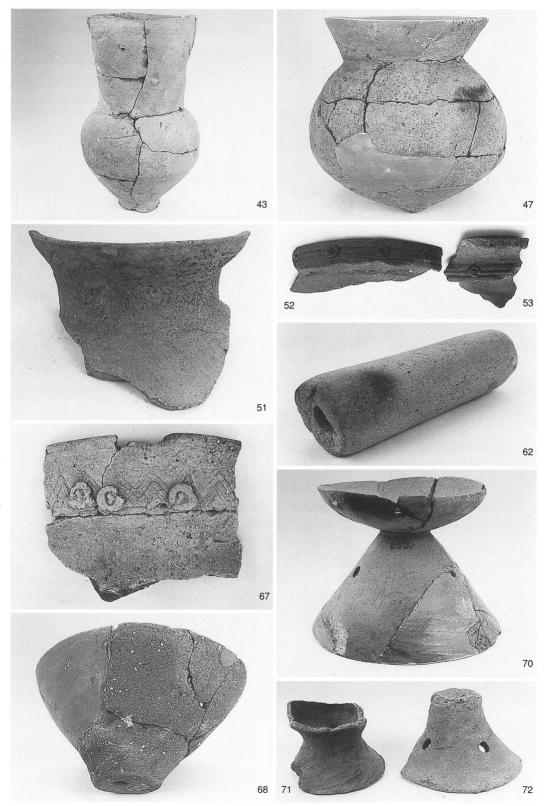
S K 301 (5), S K 302 (6), S K 304 (9 $\sim\!11)$, S D 301 (14)



S D 301



S D 301



S D 301 (43~53)、第5層(62)、第6層(67~72)

II 久宝寺遺跡第17次調査 (KH93-17)

例 言

- 1. 本書は、八尾市西久宝寺1丁目40番地で実施した遊戯場および駐車場建設工事に伴なう発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する久宝寺遺跡第17次調査(KH93-17)の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋44号 平成5年7月12日付)に基づき、坂本興産株式会社から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は、平成5年7月19日~平成5年7月30日(実働10日間)にかけて岡田清一を 調査担当者として実施した。調査面積は、約142m²を測る。なお、調査においては瀬尾泰 大・朝田要・大見康裕が参加した。
- 1. 本書に関わる業務は、遺物実測-内山千栄子・吉田由美恵、図面トレース-北原清子・遺物写真撮影-岡田が行なった。
- 1. 本書の執筆・編集は岡田が行なった。

本文目次

第	1章 は	: じめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	29
第	2章 誹	査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	30
	第1節	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	30
	第2節	基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	31
	第3節	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	33
	第4節	出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	54
笙	2音 #	Ъ. М	60

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺[図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	29
第2図		図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第3図	基本層序模	式図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	32
第4図	第1調査区	中世井戸掘方東壁面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	34
第5図	第1調査区	中世井戸埋土内出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	34
第6図	第1調査区	検出遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	35
第7図	第1調査区	S K-101·102、S D-101 遺構断面図・・・・・・・・・・・・・	36
第8図	第1調査区	S K-201遺構断面図·····	36
第9図	第1調査区	SK-201出土遺物実測図······	37
第10図	第1調査区	第8層內出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第11図	第1調査区	第9層內出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	39
第12図	第2調査区	検出遺構平面図〈古墳時代前期〉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第13図	第2調査区	S K-103遺構断面図······	•••••41
第14図	第2調査区	SK-103出土遺物(土器)実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第15図	第2調査区	S K-103出土遺物(木製品)実測図 I · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	44
第16図	第2調査区	SK-103出土遺物(木製品)実測図Ⅱ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第17図	第2調査区	SK-103出土遺物(木製品)実測図Ⅲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	46
第18図	第2調査区	S K−104 ~ 106、S P−102 · 103遺構断面図·······	•••••47
第19図	第2調査区	SK-104出土遺物実測図·····	
第20図	第2調査区	SK-105出土遺物実測図·····	••••48
第21図	第2調査区	SK-106出土遺物実測図·····	48
第22図	第2調査区	SP-101遺構断面実測図(左)・柱根実測図(右)・・・・・・	49
第23図	第2調査区	第8層內出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	50
第24図	第2調査区	第9層內出土遺物実測図 [・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	51
第25図	第2調査区	第 9 層内出土遺物実測図II·····	52

写 真 目 次

写真 1 第1調査区 中世井戸東壁面状況 (西から) ・・・・・・・・・・・・・・・・・34

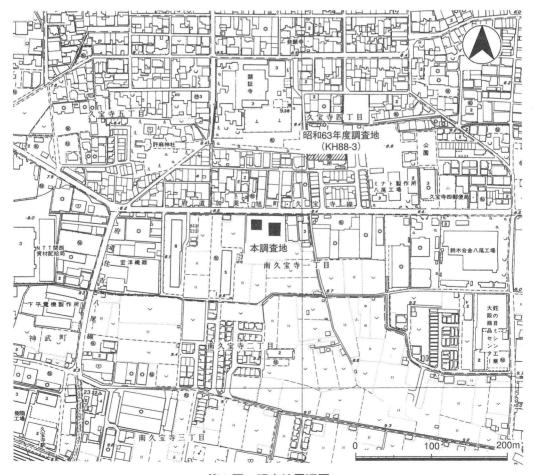
写真 2	第2調査区	SK-103遺構断面(東から)・・・・・・・・・・・・・・・・40
写真 3	第2調査区	S K – 103 木製品出土状況(南から)・・・・・・・・・43
写真4	第2調査区	発掘風景 (南東から) ・・・・・・・・・・・53
		図 版 目 次
図版一	第1調査区	第1遺構面(北から)
	第1調査区	第1遺構面 SK-101〈下〉、SK-102〈上〉(北から)
図版二	第1調査区	第1遺構面 SD-101 (北から)
	第1調査区	第2遺構面(北から)
図版三	第2調査区	古墳時代前期遺構面(西から)
	第2調査区	SK-103内木製品出土状況(北から)
図版四	第1調査区	中世井戸、SK-201出土遺物
図版五	第1調查区	SK-201、第8層、第9層出土遺物
図版六	第1調査区	第9層、第2調査区 SK-103出土遺物
図版七	第2調査区	SK-103、SK-105 出土遺物
図版八	第2調査区	SK-105、SK-106、第8層、第9層出土遺物
図版九	第2調査区	第9層出土遺物
図版一○	第2調查区	至 第9層出土遺物
図版一-	· 第2調查区	至 第 9 層出土遺物
図版一二	第1調查区	区 中世井戸、第2調査区 SK-103出土遺物
図版一三	第2調查区	☑ SK-103出土遺物
図版一四	第2調查区	☑ SK-103、SP-101出土遺物
	第1調查	図 南壁 (東から)、第2調査区 西壁 (北から)

第2調査区 西壁側下層状況 (東から)

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川左岸の低位沖積地にあたる縄文時代晩期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。遺跡の推定範囲は、東西約1.8km・南北約1.3kmを測る。現在の行政区画では八尾市の西部に位置し、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井・渋川町・跡部北の町がその範囲にあたる。周辺に隣接する遺跡では、南に亀井遺跡・跡部遺跡、東に宮町遺跡・八尾寺内町・成法寺遺跡があり、八尾市域外では、北に東大阪市の弥刀遺跡、西に大阪市の加美遺跡がある。

当遺跡は、昭和57年から58年にかけて大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによって実施された近畿自動車道天理~吹田線建設に伴なう調査(駐1)において、縄文時代晩期の自然河川、弥生時代中期~後期の掘立柱建物・方形周溝墓、古墳時代前期の「準構造船」、奈良



第1図 調査地周辺図

~平安時代の水田遺構等々多岐にわたる遺構・遺物が検出された。なかでも3世紀末~4世紀 の古墳時代前期に比定される準構造船の検出は、当該期における朝鮮半島との交流を考えるう えで貴重な資料として特筆すべきである。平成3年度に当調査研究会が北亀井3丁目のシャー プ株式会社敷地内で実施した工場建設工事に伴なう第9次調査 (註2) では、古墳時代初頭の竪 穴住居から小型仿製鏡が出土、さらに古墳時代前期に比定される前方後円墳が検出された。前 方後円墳については墳丘長約35mを測る付近一帯では最大規模の古墳であり、在地の首長ク ラスの墳墓と考えられる。平成6年度に当調査研究会が神武町143他で実施した配送センタ ー建設工事に伴なう第18次調査(賦3)では、古墳時代前期初頭(3世紀後半)の所産と考えら れる朝鮮半島系の土器2点が出土した。この2点の土器は胎土分析から、当地に移住して来た 渡来人が在地の土を用いて「軟質両耳甕」・「炉形土器」を模倣したものと判明、これまでに 日本国内においては出土例のないもので前述の準構造船同様、考古学史上に新たな知見を加え ることとなった。また、西接する大阪市側の加美遺跡では、(財)大阪市文化財協会が昭和59 年度に実施した加美東3丁目の第1次調査(註4)で、古墳時代初頭~前期(庄内式期~布留式 期)に比定される46基の方形周溝墓が検出されている。周知のように本来久宝寺遺跡西部と の一体化が考えられることから今後付近の調査を踏まえて、両遺跡間の有機的関係に興味がも たれる。

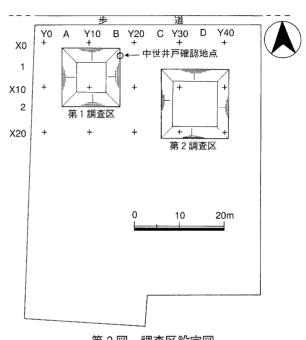
第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は遊戯場および駐車場建設工事に伴なうもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第17次調査にあたる。今回調査対象となった地点は、市教委の遺構確認調査の結果、敷地内北部の建物基礎工事部分にあたる東西2箇所である。各調査区の規模は、西側の第1調査区が6.5 m×6.5 m、東側の第2調査区が10m×10mの総面積約142 m²を測る。なお、盛土・攪乱部分にあたる表土の悪質条件の為、現地表面での掘削規模を第1調査区では13m×13m・第2調査区では15m×15mとし、今回の調査対象となる現地表下2.0 m前後の古墳時代前期の遺物を含む堆積層まで法(のり)面をつけて掘削することとなった。地区割りについては、敷地内北西部に任意の基準点を設定し、10m区画で南北方向は算用数字(北から1・2)、東西方向はアルファベット(西からA~D)で表示、地区名を1A区~2D区と呼称した。掘削は、八尾市教育委員会の遺構確認調査資料を参考に現地表(T.P.+8.4 m前後)から0.4 m~0.9 mの現代の整地層・旧耕土・床土を重機により排除した後、以下1.0~1.5 mの中・近世にあたる土層を遺構・遺物の確認を行いながら重機と人力を併用して掘

削、以下 0.7 m前後の弥生時代後期~古墳時代前期の土層については人力のみで掘削し、遺

構・遺物の検出に努めた。なお、調 査終了後は両地区とも調査区中央部 において、1辺2m四方・深さ1m 前後の規模で下層確認調査を実施し た。調査の結果、第1調査区では平安 時代後期頃の井戸1基を東壁面内で 確認、古墳時代前期(布留式古相)の 土坑 2 基(SK-101·SK-102)· 溝 1 条 (SD-101) · 弥生時代後期 末の土坑 1 基 (SK-201)、第 2 調 査区では古墳時代前期(布留式古相) の土坑 $4 基 (S K - 103 \sim S K - 106)$ 、 柱穴1個(SP-101)·小穴2個(S P-102・SP-103) を検出した。



第2図 調査区設定図

第2節 基本層序

調査区内でみる限りにおいて、2調査区とも中世以降現代までの堆積層がほぼフラットな状 況を示すことから、その時期間については比較的安定した土地条件であったことが推測される。 また、第1調査区では標高7.0m前後で平安時代末頃の河川の氾濫を示唆する砂層の堆積が みられたが、第2調査区では近接していながらもそれと対応する堆積層はみられなかった。下 層確認で摘出した第11層の厚い砂の堆積層については、周辺における調査資料から弥生時代 中期~後期前半頃の埋没河川と考えられる。以下、両地区内で普遍的に摘出できた12層につ いて列記する。

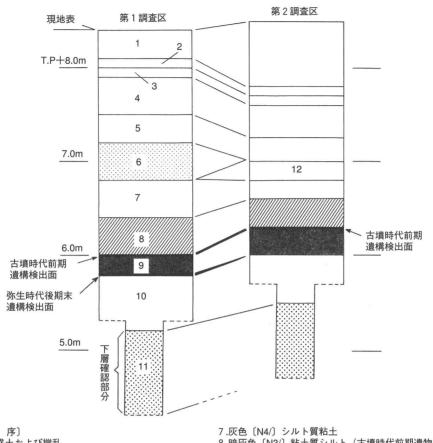
第1層:盛土および攪乱(層厚 30 ~ 70 cm)。現代の造成に伴なう整地層である。

第2層:緑黒色 [5G2/] シルト (層厚10cm前後)。旧耕土にあたる。

第3層:オリーブ黒色 [7.5 Y 3/1] シルト (層厚 10 cm前後)。床土にあたる。

第4層:にぶい黄橙色 [10 YR 6/3] 砂質シルト (層厚 40 cm前後)。中世の土師器および 瓦器椀の破片を少量含む。

第5層:黄褐色「10 YR 6/8] 細粒砂混じり粘土質シルト(層厚 30 cm前後)。平安時代後 期に比定される土師器・瓦器を含む。第1調査区北東部の東壁面で本層上面から



[層序]

- 1.盛土および撹乱
- 2.緑黒色〔5 G 2 /〕シルト(旧耕土) 3.オリーブ黒色〔7.5Y3/1〕シルト(床土)
- 4.にぶい黄橙色〔10YR6/3〕砂質シルト
- 5.黄褐色〔10YR6/8〕細粒砂混じり粘土質シルト
- 6.灰白色 [N8/] 細粒砂 (平安時代中期洪水層?)
- 8.暗灰色 [N3/] 粘土質シルト(古墳時代前期遺物包含層)
- 9.黒色 [N2/] シルト質粘土 (弥生時代後期末遺物包含層)
- 10.暗オリーブ灰色〔5 GY4/1〕砂質シルト
- 11.灰色 [N6/] 極細粒砂 (弥生時代中期自然河川?)
- 12.青灰色 [5 PB6/1] シルトと極細粒砂の互層

第3図 基本層序模式図

切り込まれる井戸を1基確認した。埋土内の土器から平安時代後期頃に廃絶した ものと思われるが、今回の調査では面的に遺構を捉えることはできなかった。

第6層:灰白色 [N8/] 細粒砂 (層厚 20~40 cm)。本層内の土器片および層位関係から平 安時代中期頃に当地を襲った河川の洪水層と考えられる。本層からの湧水は著し い。既述したように第2調査区では存在しない。

第7層:灰色 [N4/] シルト質粘土 (層厚 $20 \sim 40$ cm)。今回の調査では湧水を含む上下層 の土壌の悪条件から面的に捉えることができなかったが、本層上部にみられる畦 畔らしき起伏や人の足跡から、第1調査区の第6層を勘案すれば平安時代中期頃 に河川の洪水によって埋没した水田耕土の可能性が高い。

- 第8層:暗灰色 [N3/] 粘土質シルト (層厚30~40 cm)。弥生時代後期末~古墳時代前期 の遺物を含む。
- 第9層: 黒色 [N2/] シルト質粘土 (層厚20 cm前後)。弥生時代後期末の遺物を含む。本層上面が古墳時代前期(布留式古相)の遺構検出面になる。標高は第1調査区が T.P.+6.0 m前後、第2調査区がT.P.+6.3 m前後を測る。
- 第 10層:暗オリーブ灰色 [5 GY 4/1] 砂質シルト(層厚 $20 \sim 30$ cm)。第 1 調査区では本層上面が弥生時代後期末の遺構検出面になる。標高はT.P.+5.8 m前後を測る。
- 第11層:灰色 [N 6 /] 極細粒砂 (層厚 100 cm以上)。下層確認調査で摘出した堆積層である。 部分的にシルト質のラミナがみられ、若干の植物遺体が混入する。層内に遺物はみ られなかったが、周辺における調査結果から弥生時代中期~後期前半頃の埋没河川 と考えられる。湧水が著しい。
- 第12層: 青灰色 [5PB 6/1] シルトと極細粒砂の互層 (層厚 20cm前後)。既述した第1調 査区第6層の平安時代中期頃の河川の洪水層に起因する堆積層ではないかと思われ る。第1調査区内にはみられない。

第3節 検出遺構と出土遺物

〈第1調査区〉

[平安時代後期]

井戸側に曲物を使用した井戸で、調査区北東部の東壁面で確認した(※地点については第2図参照)。壁面で確認できた規模については、掘方上面径0.82m・深さ1.1 m前後を測る。埋土は上から第1層灰褐色 [5 YR 4/2] 礫混じり砂質シルト・第2層黒褐色 [5 YR 3/1]シルト・第3層青灰色 [10BG 6/1]シルト質粘土の3層に分層できる。井戸側となる曲物は、最深部で1段確認できた。遺物は第3層内から平安時代後期頃の所産とみられる土師器・瓦器が出土した。そのなかで図化できたものは、土師器皿2点(1・2)・瓦器椀5点(3~7)・曲物底板(8・9)の9点である。(1)の土師器皿は扁平な底部からやや内彎気味に伸びる口縁部が付く。(2)の深みのある中皿は、胎土色調が淡い乳灰色を呈する。瓦器椀は(4・7)の外面のヘラミガキが体部上半にみられるものや見込み部の格子状ヘラミガキがみられるもの(6)、すべての高台の断面が三角形を呈し、しっかりしている等の特徴から尾上編年(融5)のII-1期頃に比定されよう。(9)の曲物底板は片半部のみでその一端には、もう一方の底板を繋ぎ合わせていたことを示す樺皮紐と紐孔が確認できた。蒸器の一部としても転用されたものであろうか。法量は厚さ0.8 cm・全体の推定復原径34 cm前後を測る。

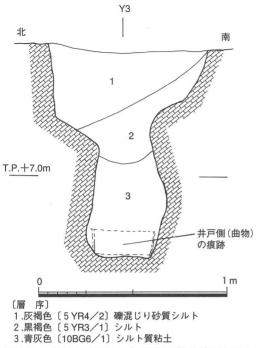
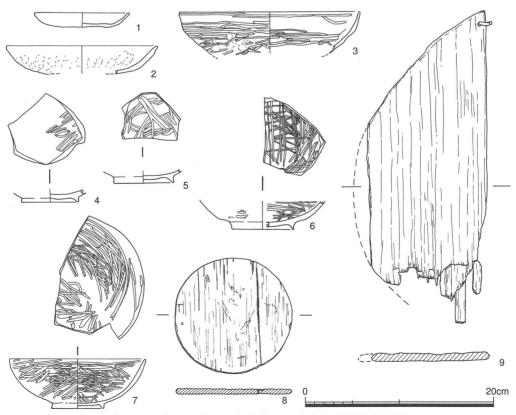


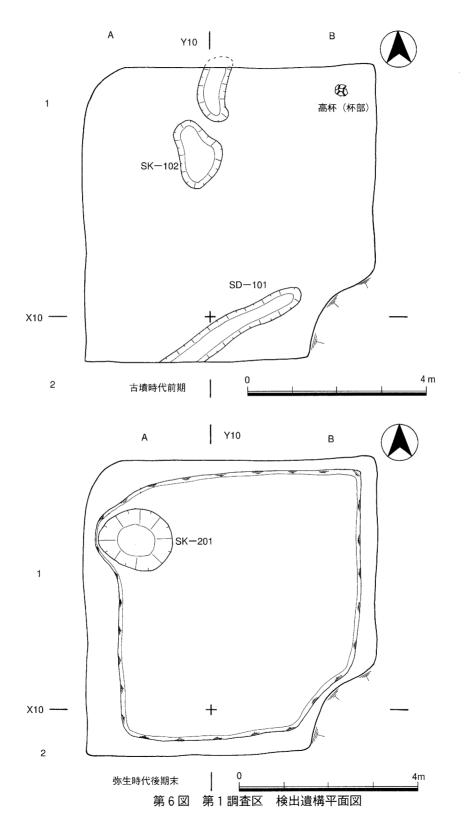


写真1 第1調査区 中世井戸東壁面状況 (西から)

第4回 第1調查区 中世井戸掘方東壁面図



第5回 第1調查区 中世井戸埋土内出土遺物実測図

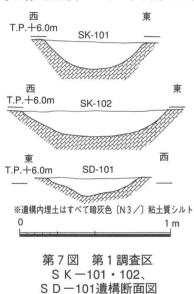


[古墳時代前期]

土坑 (SK)

SK-101

1 A区の調査区北端で検出した。遺構の北部は側溝によって削平してしまったが、平面の検出状況からみて南北に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は検出長 $1.2 \,\mathrm{m}\cdot\mathrm{m}\,0.5\sim0.7 \,\mathrm{m}\cdot$ 深さ $0.1\,8\,\mathrm{m}$ を測る。東西方向で断ち割った断面形は椀形を呈する。埋土は暗灰色 [N 3/] 粘土質シルトで、内部から古式土師器の破片が少量出土した。



SK-102

SK-101の南側で検出した。平面形状は不定形を呈する。規模は南北長1.55m・東西長0.95m・深さ0.17mを測る。東西方向で断ち割った断面形は皿形を呈する。埋土は暗灰色 [N3/] 粘土質シルトで、内部から甕・鉢の破片が出土した。

溝(SD)

S D -101

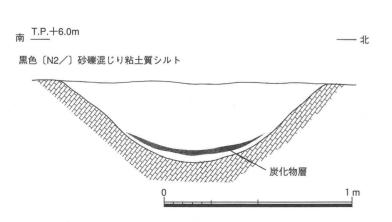
1 B区~2 A区の調査区南部で検出した。北東-南西方向に伸びる溝で北東部は途中で消滅、南西部は調査区外に至る。規模は検出長3.0 m・幅0.5 m前後・深さ0.1 m前後を測る。断面形は浅い椀形を呈する。埋土は暗灰色 [N 3/] 粘土質シルトで、遺物は出土しなかった。

[弥生時代後期末]

土坑 (SK)

S K -201

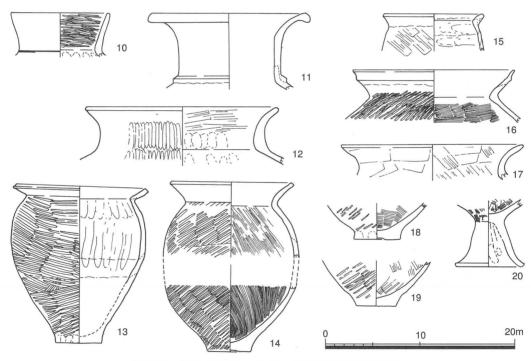
1 A区の調査区北西 部で検出した。平面形 は東西にやや長い卵形 を呈する。規模は東西 長1.6 5 m・南北長1. 4 m・深さ0.3 8 mを 測る。南北方向で断ち 割った断面形は椀形を 呈する。埋土は黒色



第8図 第1調査区 SK-201遺構断面図

[N2/] 砂礫混じり粘土質シルトで、下層部にはレンズ状に薄く炭化物層が堆積する。内部からは壺 3 点($10\sim12$)・甕 7 点($13\sim19$)・高杯 1 点(20)が出土した。

出土した土器は、すべて弥生時代後期末の寺沢・森井編年(駐6)にみる河内VI様式に比定されるものである。短頸壺(10)は口縁部のみなので断定できないが、器種別では小型長頸壺の可能性もある。(11)の広口壺の頸部に巡らされる貼付け突帯は、以前のV様式までの加飾性を残すものである。広口壺(12)は粗雑な作りである。甕は本様式では(14)のように胴部最大径が中位にあるのが主流であるが、(13)のように肩の張ったものも混在するようである。図化できた甕の口縁部をみると、すべて頸部に接合根を明瞭に残しているのが窺われる。また、口縁端部の形態では(16)の受け口状を呈するものもみられる。(20)の小型化する高杯は、本様式の特徴と言える。



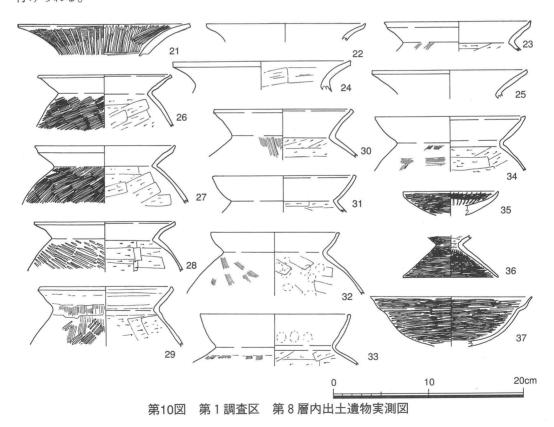
第9図 第1調査区 SK-201出土遺物実測図

「遺構に伴なわない出土遺物」

· 弥生時代後期~古墳時代前期(第8層内)

図化できたものは、高杯 1 点(21)・甕 1 3点(22~34)・器台 2 点(35・36)・鉢 1 点(37)の1 7点である。各遺物の形態および時期的位置付けは、原田分類(当調査研究会報告37 1993 年)(註7) による。(21) の高杯については弥生時代後期からの混入品であり、内外面共に密なヘラミガキが施されるうえに外面にはさらに放射状のヘラミガキが施される。胎土色調

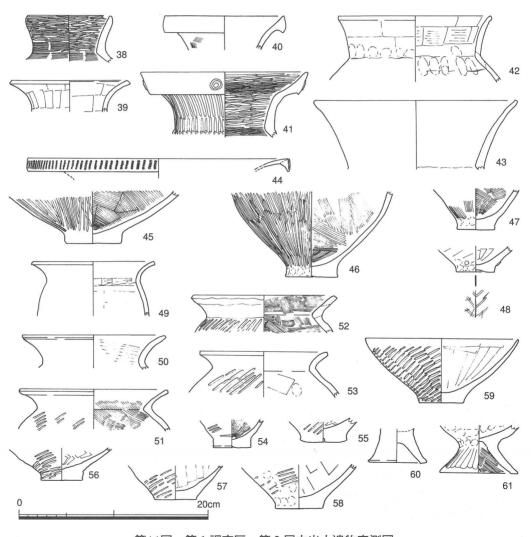
は鮮やかな明褐色を呈する。(22~27)はいわゆる河内型庄内式甕であるが、(28)の甕のみ外面左上がりタタキが施される大和型庄内式甕で、胎土も白っぽい。(22~25)は庄内式新相~布留式古相の範疇と思われるが、口縁部のみなので詳細は不明である。(26・27)は外面右上がりの連続螺旋状タタキが施される甕 B_2 で、庄内式古相にみられる。(29・30)は布留式影響の庄内式甕で甕Dにあたるもので、体部外面がハケナデ調整される。(31・32)は甕Eにあたる布留式傾向で、布留式甕の属性の一部をもつものである。(33・34)は、いわゆる布留式甕で甕 F_1 にあたる。(29~34)はすべて布留式古相にみられる。器台(35・36)のうち(35)は、皿状の受部を持つ受部が脚部に貫通しない小型のものである。一方の(36)は、屈曲部に段を持たないいわゆる鼓形器台と呼ばれ、くびれ部内は貫通する。(37)は、半球形の底部に二段に屈曲する口縁部が付く精製品の小型鉢である。器台・小型鉢共に布留式期古相に位置付けられる。



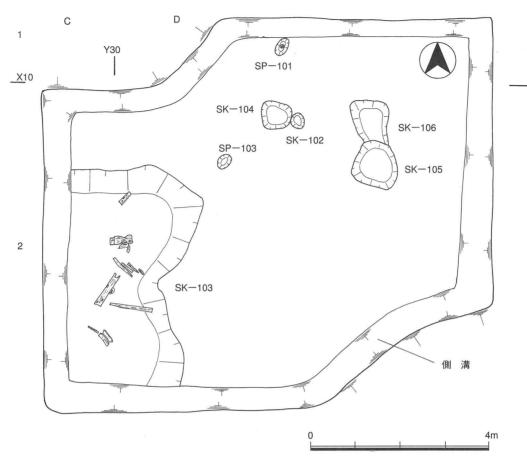
· 弥生時代後期末 (第9層内)

図化できたものは、壺 11点($38\sim48$)・甕 10点($47\sim58$)・鉢 3点($59\sim61$)の 24点である。短頸壺(38)は SK -201内出土の短頸壺(10)と同種であるが、頸部外面に 2条の凹

線を巡らす。(39・43) は、口縁部が大きく外反する広口壺である。(42) の口縁端部がやや肥厚する短頸壺は作りが粗雑である。(40・41・44) の複合口縁壺はいずれも口縁端部が肥厚して面をもつもので、その面には(41) は竹管浮文、(44) は列点文が加飾される。壺については、図化できなかった破片も含めて形態的には(39・43) にみる広口壺が主流をなし、当該期を特徴付ける。甕は肩の張らない小型のもの(49) や(52) のような肩部~口縁部まで幾重もの接合痕を残す粗製のものがある。(60・61) は台付甕または台付鉢の脚部であろう。



第11図 第1調査区 第9層内出土遺物実測図



第12図 第2調査区 検出遺構平面図〈古墳時代前期〉

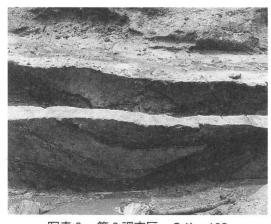


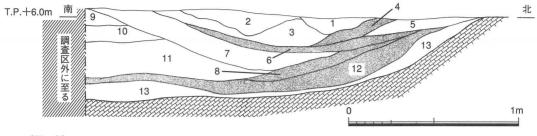
写真 2 第 2 調査区 S K -103 遺構断面(東から)

〈第2調査区〉 「古墳時代前期〕

土坑 (SK)

S K -103

・2 C区~2 D区の調査区南西部で検出した。遺構の西部および南部が調査区外に至っている為、全容は不明である。検出部での規模は、南北長4.9 m・東西長2.0~3.0 m・深さ0.3~0.55 mを測る大型の土坑である。埋土は検出できた部分でみると上層が青灰色系シルト・下層が暗灰色系シルト質



[層序]

- 2.青灰色 [5PB] 粘土質シルト
- 3.暗青灰色 [5 PB3/1] シルト
- 4.暗赤灰色〔5 R3/1〕シルト
- 5.青灰色〔5B6/1〕シルト

1.明青灰色〔5 PB7/1〕粘土質シルト 6.青黒色〔5 PB2/1〕シルト 7.青灰色〔5 PB5/1〕砂質シルト 8.青黒色〔5 BG2/1〕砂質シルト 9.灰色 [N6/] 粘土質シルト

10.暗灰色〔N3/〕粘土質シルト

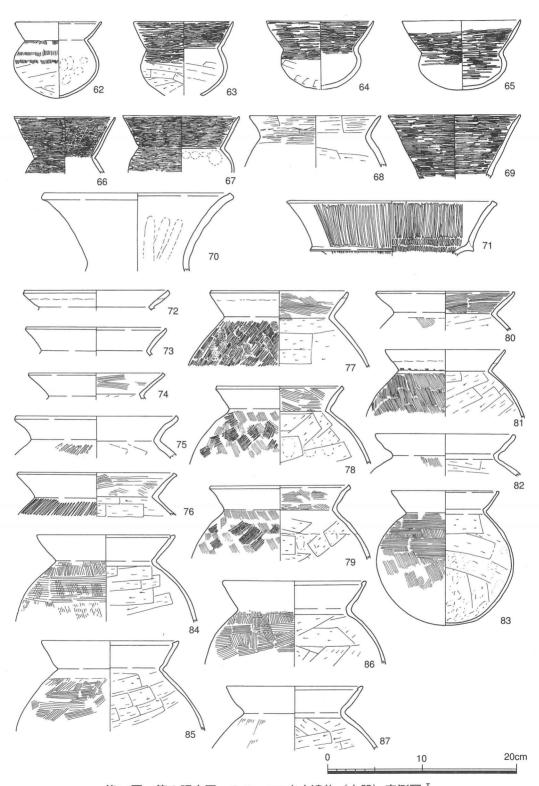
11.暗緑灰色〔7.5GY3/1〕粘土質シルト 12.緑黒色〔5 G2/1〕粘土質シルト 13.暗灰色〔N3/〕粘土

※スクリントーン は炭化物または植物 遺体を多量に含む堆積層。

第13図 第2調査区 SK-103 遺構断面図

粘土の2層に大きく分けられ、細分すると全体で13層に分層できる(第13図参照)。遺構内遺 物のほとんどは炭化物を多量に含む下層から出土した。それらの遺物出土状況や堆積状況から 2次的に埋没した様相が窺われる。遺物には土器以外に多数の木製部材があり、それらは破損 して原形を止めない断片や炭化したものが多く、図化できるものは少ない。また、床面にはほ ぼ全域に植物遺体が付着していることからもともと池状遺構を呈していたものが、のち使用不 能となった生活用具を処分するための廃棄坑として利用された可能性が強い。

出土遺物から図化できたものは、土器では壺10点(62~71)・甕16点(72~87)、木製部 材 10点 (88~97) の総数 36点を数える。小型壺 (62~67) はいわゆる小型丸底壺と呼ばれ るもので、(62)を除くとすべて内外面上半部は密なヘラミガキによって調整される。形態的 に原田分類でみると(63)は口径が体部最大径を凌駕するB、(64~67)は半球形の体部に大 きく開く口縁部が付くB,でいずれも布留式古相にあたる。(62) は口径と体部最大径がほぼ等 しいB.になるが、体部外面がハケナデ調整されるのは当該期では類例が少ない。(68)の短頸 壺は甕と見極めの困難な器種で粗製である。(69・70)の直口壺は胎土が褐色系の色調を呈す る生駒西麓産で、分類では(69)が精製品の直口壺A。、(70)が大型直口壺Aにあたり、庄内 式新相~布留式古相にみる。(71)の複合口縁壺は、口縁部・頸部とも外反するもので山陰・ 北陸地方の影響をもつもので、布留式古相にみられる。甕(72~76)は庄内式新相の範疇と 思われるが、詳細は不明である。甕(77~79)は分類では幅の狭いタタキメがハケナデによ って消される甕B」にあたる。甕 (80·81) は形態的には甕B」と同様であるが、体部外面がハケ ナデ調整される布留式影響の庄内式甕Dになる。甕(82~87)はいわゆる布留式甕で分類は 甕Fにあたり、分類をさらに細分すると(82・83)は甕F,で、口縁屈曲部の彎曲化と口縁端 部が丸味をもって肥厚するほか、ケズリが屈曲部に及ばない。さらに(82)は、体部外面上位



第14図 第2調査区 SK-103出土遺物(土器)実測図 I

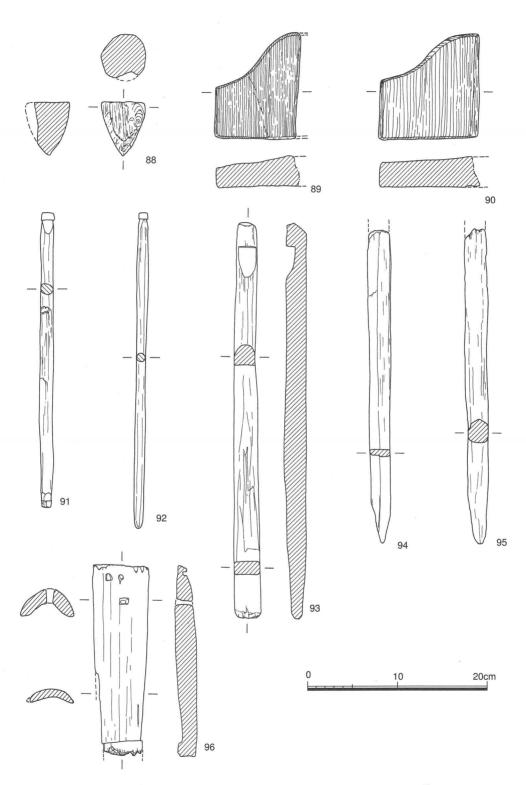
の水平方向のハケナデに特徴をもち、内底面に指頭圧痕を残す。(84~87) は口縁端部が内傾し、面を持つ甕Fになる。甕 (76~87) は布留式古相の範疇である。

次に木製遺物で図化できたものについて概説する。(88) は独楽で、径 5 cm前後の平坦な面 を残し、それより先端に向けて弾丸状に削りあげ、先端を乳頭状にやや突出させている。全長 6.0 cm·径5 cm前後。(89・90) は不定形板状木製品で、これらも用途的には不明である。法 量は (89) が残存長 9.0 cm・最大幅 9.3 cm・最大厚 3.4 cm、(90) が残存長 10.8 cm・最大幅 $11.5 \, \text{cm} \cdot$ 最大厚 $3.4 \, \text{cm} \epsilon$ 測る。 $(91 \sim 93)$ は紡織具の一部で、棒状をした布巻具または糸 巻具と思われる。(91)の両端には、紡織機の各部材を引っ張るための紐を結ぶために削り込 まれた瘤状の隆起がみられる。全長33.0cm・長径1.5cm・短径1.0cm。(92) についても 一端は破損しているが(92)と同種のものと思われる。残存長35.2cm・長径1.2cm・短径 0.9 cm。(93) は (91・92) より大型のもので、一端は破損しているがそこにもやはり対称に 抉りを有するものと思われる。残存長 43.9 cm·長径 3.0 cm·短径 2.3 cm。(94) はヘラ状の もので、用途は不明であるが全面が丁寧に削られ、整形されている。残存長 34.8 cm・幅2. 4 cm・厚さ 0.6 cm。(95) は杭で、残存長 35.2 cm・径 2 cm前後を測る。(96) は石剣等の武 器を納める鞘とみられるもので、2枚の板を組み合わせたうちの片方と考えられる。一端には 2枚の板を組み合わせる際に穿たれた樺紐孔および鞘を腰に吊り下げるために穿たれたであろ う紐孔が3箇所みられる。残存長21.5cm・最大幅6.1cm・最大厚1.6cm。(97) は破損して いるが類例から復原すると、中央が凹む曲面を呈する座板の下に「ハ」の字形の脚部を削り出 した腰掛けと考えられる。推定復元長 30 cm前後・推定復元幅 17 cm前後・脚部高 9.5 cm・部 材の厚さ $2.0 \sim 3.5 \, \mathrm{cm}$ 。(98) は、一端にほぞ穴を有する部材で、中央部分は削られて細まり くびれる。この部材は福岡市雀居(ささい)遺跡出土の大型組合式机の四本脚(駐9)に類似す る。残存長 39.2 cm・長径 13.0 cm・短(くびれ部) 径 8.5 cm。(99) は、大阪府友井東遺跡 に出土例をみる代踏み・施肥に用いる「大足」(註8) の足板と同種のものと思われる。両端の突 き出た長軸部分には梯子形の方形枠を取り付けるための緒通し孔が数箇所みられ、さらに片面 には縞状に横木の痕跡が確認される。残存長39.0 cm・最大幅10.7 cm・最大厚1.0 cm、長軸

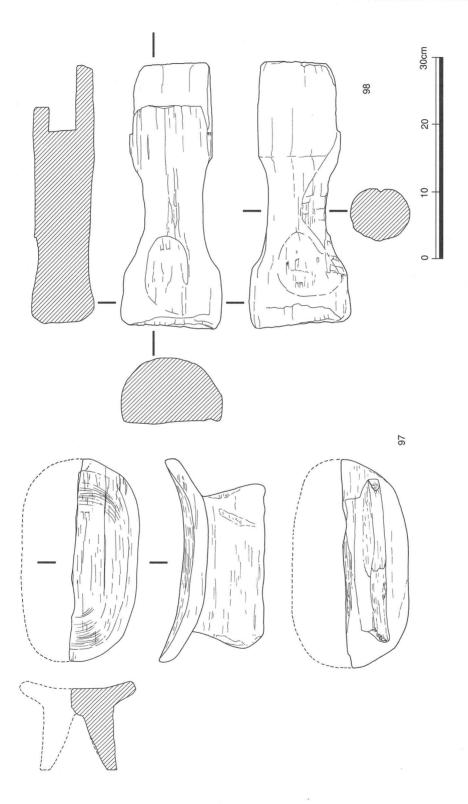
部の残存長3.5~4.5 cm·最大幅2.0 cm。(100) は建築部材の断片と思われるもので、両面共に整形され、片面には凹状の切り込み溝がみられる。長さ25.5 cm·幅18 cm前後・厚さ5~8 cm。(101~103) の3点の角材も建築部材の一部と考えられるが詳細は不明である。各々の法量は(101) -長さ30.5 cm·幅6.5 cm·厚さ4.5 cm、(102) -長さ37.5 cm·幅6.5 cm·厚さ3.7 cm、(103) -長さ31.8 cm·幅5.7 cm・厚さ4.2 cmである。



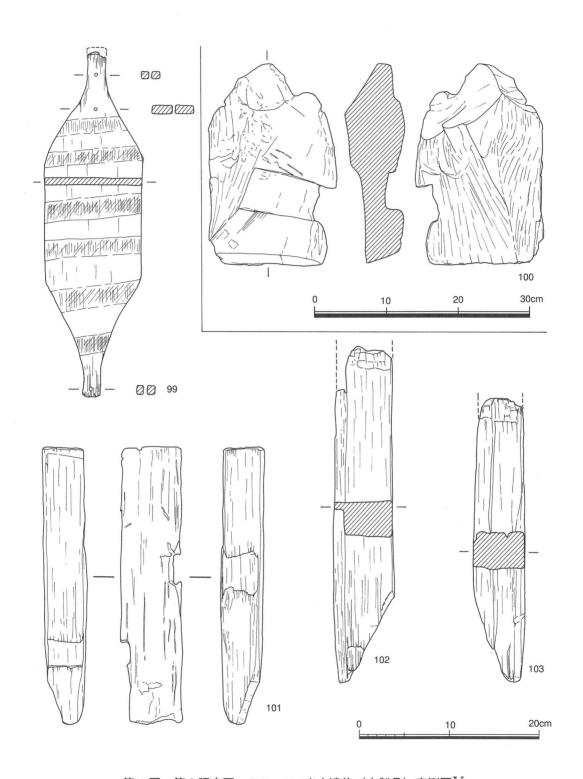
写真3 第2調査区 SK-103 木製品出土状況(南から)



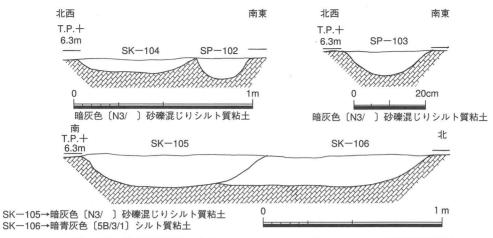
第15図 第2調査区 SK-103出土遺物(木製品)実測図Ⅱ



第16図 第2調査区 SK-103出土遺物 (木製品) 実測図Ⅱ (※S=1/5)



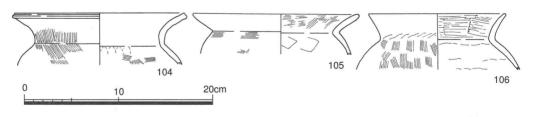
第17図 第2調査区 SK-103出土遺物(木製品)実測図 \mathbb{N}



第18回 第2調査区 SK-104~106、SP-102·103 遺構断面図

SK-104

1 D区の調査区北部中央で検出した。平面形状はやや隅丸方形を呈する。規模は径 0.7 m 前後・深さ 0.08 mを測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土は暗灰色 [N 3/] 砂礫混じりシルト質粘土で、内部からは壺 1 点(104)・甕 2 点(105・106)が出土した。一見甕と見間違える壺(104)の口縁部は、体部から大きく屈曲外反し、その端部面には 1 条の沈線が巡らされる。甕(105)の頸部外面には接合痕を消去した際のタタキメが明瞭に残る。甕(106)の口縁部は、体部から「く」の字に鋭く屈曲する。時期的に(104)の壺は口縁部の形態が特異で、在地ではあまりみられないもので搬入品の可能性が強い。甕はいずれも体部内面の調整がヘラケズリではなくヘラナデあるいはユビナデによるもので、時期的に弥生時代後期末からの混入品であろう。

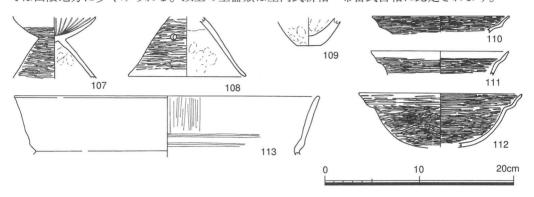


第19回 第2調查区 SK-104出土遺物実測図

SK-105

1 D区の調査区北東部で検出した。平面形状は不定形を呈する。規模は径 $1.0 \, \text{m}$ 前後・深さ $0.18 \, \text{m}$ を測る。断面の形状は浅い椀形を呈する。埋土は暗灰色 $(N \, 3/)$ 砂礫混じりシルト質粘土である。内部からは布留式古相に比定される土器が出土し、その中から図化できたものは器台 $2 \, \text{点} \, (107 \cdot 108)$ ・鉢 $5 \, \text{点} \, (109 \sim 110)$ の $7 \, \text{点}$ である。(107) の器台は貫通しない皿状の受部を持つもので、内面には放射状のヘラミガキが施される。もう一方の器台(108)

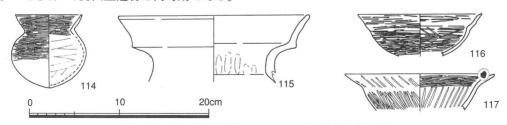
は受部が破損しているが、脚部が貫通するいわゆる鼓形器台と呼ばれるもので、脚裾部上位に透孔を有する。小型鉢(109)の底部は平坦で、全体が手づくねによる粗製である。(110~112)の小型鉢は、半球形の体部に二段に屈曲する口縁部がつく小型有段鉢とも呼ばれる精製品である。(113)の大型鉢も二段に屈曲する口縁部がつくものであるが、この大型鉢については山陰地方に多くみられる。以上の土器類は庄内式新相~布留式古相に比定されよう。



第20回 第2調查区 SK-105出土遺物実測図

SK-106

S K -105の北側で検出した。遺構の南部がS K -105によって切られる為、全容は不明である。規模は検出部で、長径 0.9 m・短径 0.6 m・深さ 0.19 mを測る。埋土は暗青灰色 $(5\,B\,3/1)$ シルト質粘土である。内部からの出土遺物で図化できたものは、壺 2 点(114・115)、鉢 2 点(116・117)の 4 点である。(114)の小型壺は、球形の体部に比較的短く内彎気味に伸びる口縁部が付く。(115)の複合口縁壺は、口縁部・頸部ともに外反するもので山陰系と思われる。小型鉢(116・117)のうち(116)はS K -105出土(110~112)の小型鉢と同種であるが、(117)の屈曲しない口縁部を持つ小型鉢については、その色調・胎土・調整から弥生時代後期~後期末の所産で、あきらかに混入品である。この(117)の鉢を除いてすべてS K -105出土遺物と同時期である。

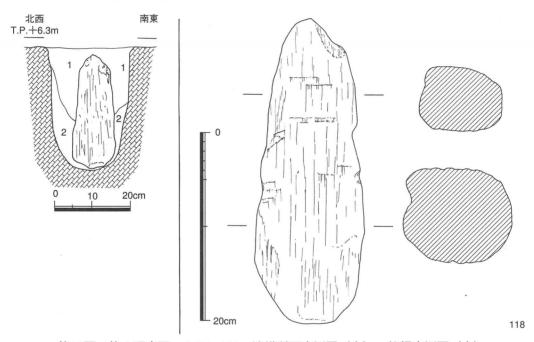


第21回 第2調查区 SK-106出土遺物実測図

柱穴および小穴(SP)

S P -101

1 D区の調査区北端部中央で検出した。柱根(118)が遺存する柱穴で、平面形状はやや北東-南西方向に長い楕円形を呈する。規模は長径0.4 m・短径0.24 m・深さ0.64 mを測る。北西-南東方向で断ち割った断面形状は、U字形を呈する。埋土は上層暗灰色(N 3/)砂礫混じりシルト質粘土、下層青黒色(5 B 2/)シルト質粘土の2層に分類できる。遺物は上層から古式土師器の小破片が僅かに出土したが、図化できるものはなかった。柱根の法量は残存長32.5 cm・最大径11.4 cmを測る。



第22図 第2調査区 SP-101 遺構断面実測図(左)・柱根実測図(右)

SP-102

SK-104の東側で検出した。平面形状はほぼ円形を呈する。規模は径 $0.3 \,\mathrm{m}$ 前後・深さ $0.11 \,\mathrm{m}$ を測る。断面形状は半円形を呈する。埋土は暗灰色(N3/)砂礫混じりシルト質粘土で、内部からの出土遺物はなかった。

S P -103

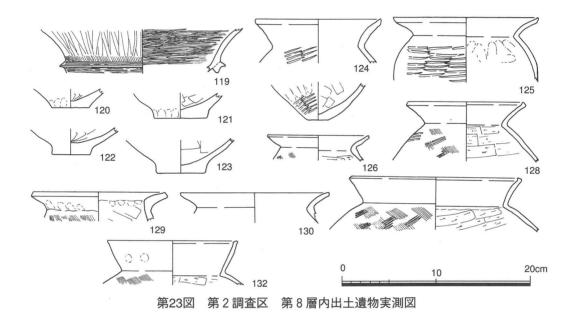
2 D区のSK-103の北東側で検出した。平面形状は北東-南西方向にやや長い楕円形を呈する。規模は長径0.35 m・短径0.25 m・深さ0.13 mを測る。断面形状は椀形を呈する。埋土は暗灰色 (N 3/) 砂礫混じりシルト質粘土で、内部からの出土遺物はなかった。

「遺構に伴なわない出土遺物】

· 弥生時代後期末~古墳時代前期(第8層内)

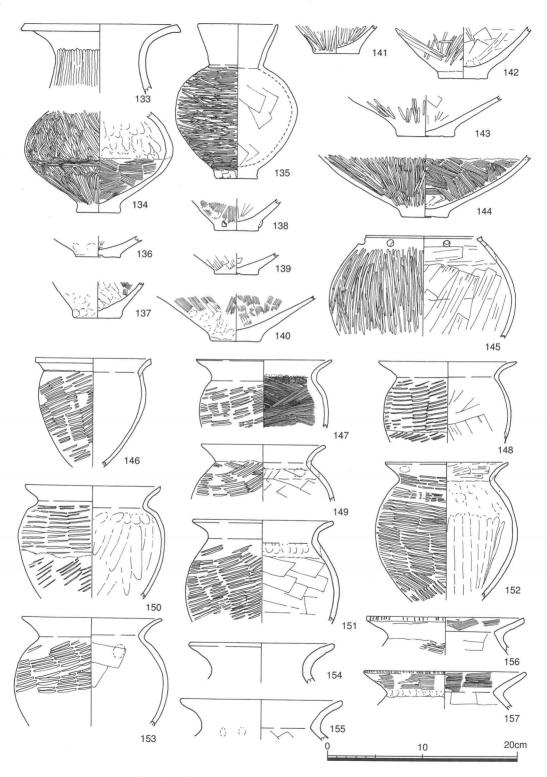
出土遺物のうち図化できたものは、壺5点(119~123)・甕9点(124~132)の14点で

ある。(119)の複合口縁壺は、口縁部と擬口縁部との接合点が突帯状に張り出すもので、河内VI-2様式に比定されよう。(124~126)の3点の甕もその成形・技法から(119)の壺とほぼ同時期であろう。(124・125)の甕は大きさが異なるが、いずれも体部外面上位の極細のタタキメがハケナデによって消去される甕 B_4 に比定される。(129)の甕は、肩の張らない体部に器壁が厚く短い口縁部が2度にわたって接合され、全体的に作りが粗雑である。(132)はいわゆる布留式甕で、口縁端部の内部肥厚が内傾し面を持つ甕 F_2 にあたる。図化不能な遺物も含めると、第2調査区の第8層には以上のように、第1調査区に比べ弥生時代後期末の遺物が古墳時代前期(布留式古相)の堆積層内に混在する割合が高い。

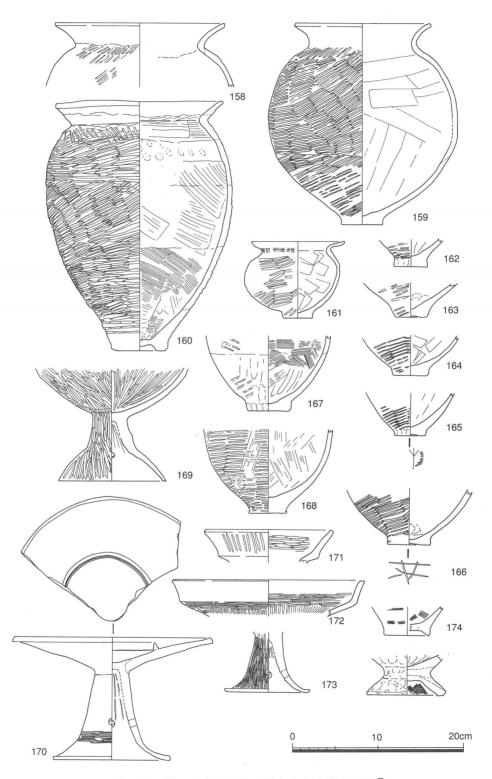


· 弥生時代後期末 (第9層内)

第2調査区では、当該期の遺構が検出されなかった割りには、弥生時代後期末いわゆる河内 VI様式に比定される遺物が多量に出土した。また、器種別では出土遺物全体の8割が甕である。次いで壺になるが、壺に関しては甕に比べて底部以外に口縁部や体部から図化できる残存率の良いものは少ない。以下、図化できた土器類を概観する。内容は壺13点(133~145)・甕23点(146~168)・高杯5点(169~173)・鉢2点(174・175)の総数43点である。(133)は比較的長めの頸部に大きく外反する口縁部が付く広口壺で、頸部外面は縦方向のヘラミガキ調整が施される。(134・135)はいわゆる長頸壺でいずれも体部最大径を中位にもつ。しかし、体部外面のヘラミガキをみると(134)の乱雑な不正方向に対して、(135)の方はすべて横方向に丁寧にしかも緻密に施され、双方に調整技法の相違が窺われる。図化した壺底部



第24図 第2調査区 第9層內出土遺物実測図 [



第24図 第2調査区 第9層內出土遺物実測図Ⅱ

の調整には、ユビオサエ(136・137)・ハケナデ(138・140)・ヘラナデ(139)・ヘラミ ガキ(141~144)の4タイプがある。無頸壺(145)については極めて当該期に類例が少なく、 一時期古い河内V様式からの混入品の可能性が高い。体部はほぼ球形を呈し、口縁部に蓋用の 紐孔が穿たれる。甕はそのほとんどが小型で球胴化した当該期の特徴を示す。しかし、なかに (158·160) のように大型で体部最大径を上位にもつ形態の古い河内V様式からの混入品とみ られるものも散見される。他に当該期の甕の特徴の一つに、口縁部を別に付加した痕跡(接合 痕)と明瞭なくびれを残すことが挙げられるが、(152)のような頸部の接合痕をタタキメに よって消去しようとする気風のものもみられる。また、(156・157)の口縁端部面にみられる ヘラキザミの施文は、加飾性の無い当該期にあって目立つ存在である。形態の不格好な粗製の ミニチュア甕(164)は、口縁部がやや水平に伸び受口状を呈する。(165・166)の甕の底部 には、ヘラ状工具による木の葉文のような線刻がみられる。深い椀形の杯部を持つとみられる 高杯(169)は、脚部内面以外すべてヘラミガキ調整される。また、脚部が(173)のような 外反屈曲して伸びる裾部が主流の当該期にあって、(169)の椀を伏せたような形態を持つ脚 部は類例が少ない。(170)の盤状の杯部内面に、断面三角形の突帯状の隆起をもつ高杯はさ らに類例の少ないもので、河内では「長原遺跡SB-01」(註9)に1点類例をみる。この高杯 は寺沢・森井編年によれば河内 V-2様式に位置付けられることから一時期古い混入品と思わ れる。当該期の高杯は、今回図化できなかったものを含めて(171)のようにV様式までのも のに比べてやや小型化するのが一般的と考える。台付鉢(174・175)の高台は(174)がつま み出し、(175) は継ぎ足し(接合)によるもの成形および技法である。

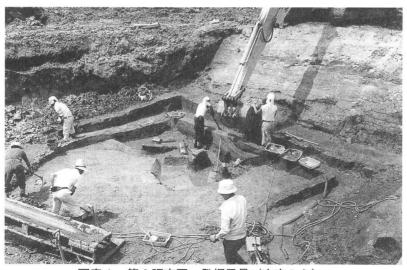


写真4 第2調査区 発掘風景(南東から)

第4節 出土遺物観察表

第1調査区

※胎土- ()内は主要な鉱物名を示す。長-長石・雲-雲母・角-角閃石・石-石英・チーチャート・酸-酸化土粒

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土	焼 成	遺存度	備考
1	皿 (土師器)	10.0 1.5		淡褐色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	ほぼ完 存	
2	中世井戸内 同 上	16.0	内外面共にヨコナデ、ユビナデ	乳灰色	密	良好	口縁部	
3		19.2	外面:ユビオサエ後ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	暗灰色	密	良好	1/3 口縁部 1/6	
	中世井戸内			正体	ata	± 47.		
4	同上	高台高 0.7	外面:ナデ 内面:ヘラミガキ	灰色	密	良好	底部 1/3	
5	同上	高台径 6.1		暗灰色	密	良好	底部の	
Ŭ	177	高台高 0.5 高台径 5.8					み	
6	同上			灰色	密	良好	底部	
四		高台高 0.8 高台径 6.6					1/2	
7	同上	14.4	内外面共にヘラミガキ	灰色	密	良好	1/3	
四		5.2 高台高 0.9 高台径 5.6						
10	短頸壷 (弥生土器) S K - 201	10.2	外面:ヨコナデ、ヘラナデ 内面:ヘラミガキ、ユビオサエ	淡灰茶色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4	
11	広口壺 (弥生土器) S K -201	16.2		淡茶色	5 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 2/3	
12	同上	20.0		淡灰茶色	5 mm以下の砂	良好	口縁部	
75	,,,	_	内面:ヘラミガキ、ユビオサエ		粒を含む (雲母)		1/6	
13	売(弥生土器)SK-201	13.4 16.7 体部最大径		黒褐色 淡灰色	3 mm以下の砂 粒を含む (長、石)	良好	3/4	外面に煤付着
		14.0 底径 4.8						
14	同上	12.6	接合痕(体部)1条	淡茶灰色 淡灰褐色	3 mm以下の砂 粒を含む(長)	良好	1/3	
15	同上	底径 4.4		淡茶褐色	4 mm以下の砂	良好	口縁部~	
			内面:ヨコナデ、ユビナデ、接合痕(頸 部~肩部)3条		粒を含む		肩部1/6	
16 五.	同上	16.0	・ 外面:ヨコナデ、タタキ (3本/cm)、接合痕(口縁部) 1条内面:ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm)	淡褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
17	同上	19.0		淡灰褐色	3 mm以下の砂 粒を含む(長)	良好	口縁部 1/6	
18	同上		外面: タタキ、ユビオサエ 内面: ハケナデ	灰褐色	4 mm以下の砂 粒を含む(長)	良好	底部のみ	
五.		底径 4.8						
19	同上	_	外面: タタキ 内面: ヘラナデ	淡茶褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4	
五 20	高杯	底径 4.0) 外面:ハケナデ、ナデ	淡茶褐色	3 mm以下の砂	良好	脚部の	
	(弥生土器)	-	内面:ヘラナデ、ユビオサエ、シボリ目	8大万下門 巴	粒を含む(長)	Lexi	み	
五 21	SK-201 高 杯	裾径 6.8		明褐色	1 mm以下の砂	良好	口緑部	
	高 か (弥生土器) 第8層	18.0) 外面・ハケナア侵へフミガギ ・ 内面:ヘラミガキ	77 PB E	粒を含む (長、雲、角)	75%]	1/5	
<u>II</u>	売 の 圏	16.3	3 内外面共にヨコナデ	淡黄茶色	3 mm以下の砂	良好	口縁部	
عد	(土師器) 第8層	-	The state of the s	淡茶褐色	粒を含む		1/4	
23	同上	15.4	り 外面:ヨコナデ、ハケナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	茶褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/5	

24	甕			内面	胎土	焼成	遺存度	備	考
	(土師器) 第8層	18.6	外面: ヨコナデ 内面: ヘラナデ	淡黄褐色 明茶褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6		
25	同上	16.4	内外面共にヨコナデ	茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む(雲、石)	良好	口縁部		
26 五	同上	14.0		茶灰色	2 mm以下の砂	良好	1/8		
27	同上	14.8		暗茶灰色 茶褐色	粒を含む 5 mm以下の砂	良好	月部1/6 口縁部~		
28	同上	14.6	内面:ヨコナデ、ヘラケズリ 同 上	暗茶灰色	粒を含む(長) 4 mm以下の砂	良好	肩部1/3 口縁部~	大和型	
29	同上	12.2		茶褐色	粒を含む (雲) 3 mm以下の砂	良好	肩部1/4 口縁部~		1
五 30	同上	14.4	内面: ヨコナデ、ヘラケズリ 外面: ヨコナデ、ハケナデ	茶灰色	粒を含む 2 mm以下の砂	良好	肩部1∕8 □縁部		
31	同上	14.6		乳褐色	粒を含む 1 mm以下の砂	良好	1/8		
五 32	同上	13.4	内面:ヨコナデ、ヘラケズリ 外面:ヨコナデ、ハケナデ	茶褐色	粒を含む (雲) 6 mm以下の砂	良好	1/4		
33	同上	15.8	内面:ヨコナデ、ユビオサエ後ヘラナデ 同 上	乳灰色	粒を含む(長、雲) 2 mm以下の砂	良好	月部1/8 口縁部		
五 34	同上	15.8	外面:ヨコナデ、ハケナデ	淡茶色 暗茶色	粒を含む (雲) 5 mm以下の砂	良好	1/6		
五 35	器台		内面:ヨコナデ、ヘラケズリ 内外面共にヘラミガキ	淡茶色	粒を含む(雲) 1mm以下の砂	良好	1/8		
	(土師器) 第8層	-		100 100 100	粒を含む	及灯	受部 1/3		
36	同上	-	外面: ヘラミガキ 内面: ヘラケズリ、ヘラミガキ	暗灰茶色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	脚部 2/3		
五 37	鉢	裾径 10.0	内外面共にヘラミガキ	沈知在	1 017 076	h 47	1 (0		
3,	(土師器)	-	アジアト国大いに、ソベカギ	淡褐色	1 mm以下の砂 粒を含む	良好	1/3		
38	短頸壷 (弥生土器) 第9層	8.6	内外面共にヘラミガキ、ハケナデ (10本/cm)、顕部外面に 2条の凹線を有する。	黄褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/3	1 2 11	
39	広口壷 (弥生土器) 第9層	12.0	内外面共にヨコナデ、ヘラナデ	淡褐色	6 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/5		
40 ∄	同上	12.6	外面:ヨコナデ、ハケナデ 内面:磨滅の為調整不明	乳茶色	1 mm以下の砂粒 を含む(長、角、石)	良好	口縁部 1/6		
41 五	複合口縁壷 (弥生土器) 第 9 層	17.7 —	外面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラ刻目 (頸部外面)、竹管浮文(口縁端部) 内面:ヘラミガキ	茶褐色 明褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4		
42	短頸壷 (弥生土器) 第 9 層	16.0 —	外面:ヘラナデ、ユビオサエ、接合痕 (顕部) 1条 内面:ヘラナデ、ユビオサエ、接合痕 (扇部) 2条	明茶褐色	6 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4		
43	広口壷 (弥生土器) 第9層	21.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、接合痕(頸部) 1 条	淡灰茶色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4		
44	同上	27.6 —	外面:ヨコナデ、列点文 内面:ヨコナデ	灰茶色	やや精良	良好	口縁部 1/6		
五. 45	童 (弥生土器)	- - - -	外面:ヘラミガキ 内面:ハケナデ(10本/cm)	灰茶色	3 mm以下の砂 粒を含む (長)	良好	底部のみ		
46	第9層 同 上	底径 5.8	外面: ヘラミガキ、ユビオサエ 内面: ハケナデ (7本/cm)	淡茶灰色	3 mm以下の砂	良好	底部の		
五.	lei L	底径 5.6		淡褐色	粒を含む		<i>д</i>		
47	同 上		外面:ハケナデ、ユビオサエ 内面:ハケナデ (8本/cm)	茶褐色 淡灰茶色	2 mm以下の砂 粒を含む (雲)		底部の		
48	同上	_	外面:ユビオサエ後ヘラナデ。底部に木 の葉文。	乳褐色	4 mm以下の砂 粒を含む		底部のみ		
<i>Ŧ</i> ī.		底径 5.0	内面:ヘラナデ				- /-		
49	甕 (弥生土器) 第 9 層		外面:ヨコナデ、体部下半は磨滅の為調整不明。 内面:ヨコナデ、ヘラナデ、接合痕(頚 部)1条	茶褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6		

遺物番号	器種	(cm)	口径	調 整 ・ 手 法	色調 外面	胎土	焼 成	遺存度	備考
図版番号	出土地点	法量	器高		内面				
50	甕		15.0	外面:ヨコナデ	乳褐色	1 mm以下の砂	良好	口縁部	
	(弥生土器)			内面:ヘラナデ		粒を含む		1/6	
	第 9 層								
51	同上		15.4	外面:ヨコナデ、タタキ	乳褐色	1 mm以下の砂	良好	口縁部	
				内面:ヨコナデ、ハケナデ (6本/cm)		粒を含む		1/6	
52	同上		14.8	外面:ヨコナデ、タタキ(4 本/1.5cm)、		2 mm以下の砂	良好	口縁部	
			_	接合痕(口縁部~頚部)3条	乳茶褐色	粒を含む		1/3	
六				内面:ハケナデ (10~12本/cm)					
53	同上		15.4	外面:ヨコナデ、タタキ	乳茶色	4 mm以下の砂	良好	口縁部	
			_	内面:ヨコナデ、ユビオサエ後ヘラナデ		粒を含む		1/6	
54	同上		****	外面:タタキ、ユビナデ	淡茶灰色	3 mm以下の砂	良好	底部の	外面に黒斑
				内面:ハケナデ(8本/cm)		粒を含む(長、		み	
		底径	4.0			雲、角、石)			
55	同上			外面:タタキ、底部中央に刺突孔	茶褐色	3 mm以下の砂	良好	底部の	
				内面:ヘラナデ		粒を含む		み	
六		底径	4.8			111-01-01		ala der a	all to the second
56	同上		-	外面:タタキ	淡乳灰色	4 mm以下の砂	良好	底部の	内外面に黒斑
			-	内面:ヘラナデ		粒を含む(長、		み	
		底径	4.4			雲、角、石)	st. 1.7	and the sets	
57	同上		_	同上	暗茶褐色	5 mm以下の砂	良好	底部の	
	1		_		淡褐色	粒を含む		み	
六		底径	4.4		Note that the An	e bien en	+ LT	elector en	Fel (CC) + Mt LL Hr
58	同 上		_	外面:ユビオサエ後タタキ	淡黑灰色	5 mm以下の砂	良好	底部の	外面に煤付着
			_	内面:ヘラナデ		粒を含む		み	
		底径	5.0		NEAD A	O NET OF	P 1.7	13.1362	
59	同上		16.0	外面:ヨコナデ、タタキ (4本/cm)	淡褐色	3 mm以下の砂	良好	ほぼ完	
六			6.8	内面:ヘラナデ	DOWN INC A	粒を含む	D 47	存	
60	脚台部		_	内外面共にナデ	明乳灰色	2 mm以下の砂	良好	脚台部	
	(弥生土器)		_			粒を含む		のみ	
六	第9層	底径	5.3	H=	Merchania	1 017 076	p 47	840 /a 447	内面に黒斑および煤
61	同上		_	外面:ユビオサエ、ヘラナデ	淡灰茶色	1 mm以下の砂	良好	脚台部	付着
			_	内面:ユビオサエ、ハケナデ (10本/cm)		粒を含む(長、	-	2/3	11) 7월
六			8.2		<u> </u>	石)	L		1

第2調査区

遺物番号図版番号	器 種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調 整 ・ 手 法	色調 外面 内面	胎土	焼成	遺存度	備	考
			117		0 NTT 0 7h	15 67	2/3		
62	小型壷	9.0	外面:ヨコナデ、ハケナデ (12本/cm)、	淡褐色	3 mm以下の砂	良好	2/3		
	(土師器)	8.1			粒を含む				
六	S K -103	体部最大径	内面:ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ						
		9.0		No otto LET de	- Merchanis	di 1.7	. (0		
63	同上	10.4	外面:ヘラミガキ、ヘラケズリ	淡茶褐色	1 mm以下の砂	良好	1/3		
1		-	内面:ヘラミガキ、ナデ、ヘラナデ		粒を含む				
六		体部最大径							
		9.2							
64	同上	11.2	外面:ヘラミガキ、ヘラケズリ	淡茶褐色	2 mm以下の砂	良好	1/2		
			内面:ヘラミガキ、ナデ		粒を含む(雲、酸)				
六		体部最大径							
		8.5							
65	同上	12.4	外面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ	明褐色	3 mm以下の砂	良好	1/3		
		7.4	内面:ヨコナデ、ヘラミガキ		粒を含む				
六		体部最大径							
		9.3							
66	同上	10.4	内外面共にヘラミガキ	暗褐色	精良	良好	口縁部		
六							2/3		
67	同上	12.0	外面:ヘラミガキ、接合痕(頸部)1条	茶褐色	3 mm以下の砂	良好	1/6		
六		_	内面:ヘラミガキ、ユビオサエ		粒を含む				
68	短頸壷	13.4	外面:ヘラナデ、ナデ、接合痕(口縁部)	暗茶褐色	3 mm以下の砂	良好	口縁部		
	(土師器)	_	1条		粒を含む		1/3		
六	S K - 103		内面:ヘラナデ、ヘラケズリ						
69	直口壷	14.0	内外面共にヘラミガキ	淡褐色	1 mm以下の砂	良好	口縁部		
	(土師器)	_			粒を含む		1/4		
	S K - 103								
70	大型直口壺	19.8	外面:ヨコナデ	茶褐色	4 mm以下の砂	良好	口縁部		
	(土師器)	-	内面:ユビナデ後ヨコナデ		粒を含む		1/3		
六	SK-103								

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	調整・手法	色調 外面 内面	胎土	焼 成	遺存度	備考
71	複合口縁壷 (土師器) SK-103	21.3	外面: ヘラミガキ、接合痕 (口縁部) 1 条 内面: ヘラミガキ	茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む(長、 雲)	良好	口縁部 1/6	
72	整(土師器)SK-103	15.2		茶褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4	
73	蹇 (土師器) S K - 103	14.8	内外面共にヨコナデ	暗茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む (雲)	良好	口縁部 1/3	
74	変 (土師器) S K-103	14.2	外面: ヨコナデ 内面: ハケナデ、ヘラケズリ	暗灰色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
75	同上	17.0	外面:ヨコナデ、タタキ (3本/cm) 内面:ヨコナデ、ヘラナデ	淡褐色 暗茶色	4 mm以下の砂 粒を含む (雲)	良好	口縁部 1/6	
76	同上	16.4	外面: ヨコナデ、タタキ (5本/cm) 内面: ハケナデ、ヘラケズリ	暗灰色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
77 七	同上	14.4	外面: ヨコナデ、タタキ (7本/1.5cm) 後ハ ケナデ (6本/cm)、接合膜 (口縁部) 1条 内面: ハケナデ (10本/cm)、ヘラケズリ	淡褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
78 七	同上	13.4	内面: ハケナデ (10本/cm)、ステッスラ 外面: ヨコナデ、タタキ (7本/1.5cm) 後 ハケナデ (5本/cm) 内面: ハケナデ (10本/cm)、ユビナデ後ヘラケズリ	暗茶灰色	4 mm以下の砂 粒を含む(長)	良好	口縁部 1/4	
79 七	同上	14.8	外面: ヨコナデ、タタキ(6本/cm)後 ハケナデ(10本/cm) 内面: ハケナデ、ユビナデ後ヘラケズリ、	淡灰茶色	3 mm以下の砂 粒を含む (雲)	良好	口縁部 1/6	
80	同上	14.4	接合痕(肩部)1条 外面:ヨコナデ、ハケナデ、接合痕(肩部)1条	暗茶灰色	4 mm以下の砂	良好	口縁部	
81	同上	12.8	内面:ハケナデ (12本/cm)、ヘラケズリ 外面:ヨコナデ、ハケナデ (10~13本/cm)、接合痕 (口縁部) 1 条	茶褐色	粒を含む (雲) 1 mm以下の砂 粒を含む (雲)	良好	1/6 口縁部 完存 肩	
七 82	. 同上	14.4	内面:ヨコナデ、ヘラケズリ 外面:ヨコナデ、ハケナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	乳褐色~ 黒灰色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	部1/3 口縁部 1/6	外面に煤付着
83 七	同上	11.0 14.3 体部最大径	外面: ヨコナデ、ハケナデ (10本/cm) 内面: ヨコナデ、上位ヘラケズリ、下位 ユビオサエ	暗茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	4/5	
84 七	同上	14.5	外面:ヨコナデ、ハケナデ (5本/cm) 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	黒褐色 灰褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	1/4	
85 七	同上	14.4	外面:ヨコナデ、ハケナデ (6本/cm) 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	黒褐色 暗灰褐色	3 mm以下の砂 粒を含む (雲)	良好	1/3	外面に煤付着
86 七	同上	15.0 —	同上	暗茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	1/6	外面に煤付着
87	同上	_	外面:ヨコナデ、ハケナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	乳灰色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	1/6 口縁部	
104	壺 (弥生土器) S K - 104	18.0	外面:ヨコナデ、ハケナデ(8本/cm) 内面:ヨコナデ、ユビオサエ後ハケナデ	淡茶褐色	5 mm以下の砂 粒を含む(長、 雲、石)	良好	1/6	外面に煤付着
105	甕 (弥生土器) S K — 104	14.6 —	外面:ヨコナデ、ハケナデ (6本/cm)、 接合痕 (頸部) 1条 内面:ヘラナデ、ナデ、接合痕 (肩部) 3条	茶灰色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	外面に煤付着
106	同上	18.6 —	外面:ヨコナデ、ハケナデ 内面:ハケナデ、ヘラナデ、接合痕 (頸部) 1条	灰褐色	5 mm以下の砂 粒を含む (雲)	良好	口縁部 1/8	外面に煤付着
107 七	器 台 (土師器) S K - 105	8.6	外面:ヨコナデ、ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ、ユビオサエ後ヘラナ デ	淡褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	裾部のみ欠損	
108	同上	8.6	外面:ヘラミガキ、ヨコナデ、三方孔? 内面:ユビオサエ、ヨコナデ、接合痕1条	淡褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	脚部 1/3	
109	小型鉢 (土師器) S K -105	底径 2.4	内外面共にユビオサエ (ナデ)	淡灰色	3 mm以下の砂 粒を含む(長)	良好	底部のみ	
110	鉢 (土師器) S K - 105	14.4	内外面共にヘラミガキ	淡茶褐色	1 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
111	同上	14.4	内外面共にヨコナデ、ヘラミガキ	淡褐色	2 mm以下の砂 粒を含む (雲)	良好	口縁部 1/6	

遺物番号 図版番号	器 種出土地点	(cm) 口径 法量、器高	調 整 ・ 手 法	色調 外面 内面	胎土	焼 成	遺存度	備考
			同 上	茶褐色	2 mm以下の砂	良好	1/4	
112	鉢 (土師器) S K -105	17.2	P	明褐色	粒を含む	I IRXI	1/4	
113	同上	32.0	外面:ヨコナデ 内面:ヘラナデ	淡褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	外面に黒斑
114	小型鉢 (土師器)	7.4 8.1	外面: ヘラミガキ、体部下半は磨滅の為 調整不明	茶褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	ほぽ完 存	外面に黒斑
八	S K -106	体部最大径 8.3	内面:ヘラミガキ、ヘラナデ					
115	複合口縁壺 (土師器)	21.2 -	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、ユビナデ	茶褐色 淡茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む(長、 角、石)	良好	口縁部 1/8	
116	S K - 106 鉢 (土師器)	13.8	内外面共にヘラミガキ	淡茶灰色	1 mm以下の砂 粒を含む(長)	良好	1/3	
八	S K -106					4. (**	- fort dort	
117	鉢 (土師器) S K - 106	16.8 —	同 上	暗灰色	4 mm以下の砂 粒を含む(長、 雲)	良好	1/6	
119	複合口緑壷		同上	淡褐色	2 mm以下の砂	良好	頸部	
八	(弥生土器) 第8層	AMAN	P) <u>1</u>	IX NO CS	粒を含む	JEAI	1/3	
120	壷	_	外面:ユビナデ (オサエ)	暗茶褐色	2 mm以下の砂	良好	底部の	
八	(弥生土器) 第8層	底径 4.0	内面:ヘラナデ		粒を含む		み	内外面に煤付着
121	同上	_	外面:ユビナデ (オサエ) 内面:ヘラナデ	淡茶灰色	5 mm以下の砂 粒を含む(長、	良好	底部のみ	
八		底径 5.6			雲、石)			
122	同上	-	外面:磨滅の為調整不明 内面:ヘラナデ	淡茶灰色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
八		底径 4.0						
123	同上	_	同上	暗茶色 淡茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
八		底径 5.0						
124	変 (弥生土器)	13.2	外面:ヨコナデ、タタキ 内面:ヨコナデ、ナデ	暗灰色 淡褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
125 八	第8層 同上	15.4	外面:ヨコナデ、タタキ (3本/cm) 内面:ヨコナデ、ユビナデ	茶褐色 灰茶色	2 mm以下の砂 粒を含む(長、雲)	良好	口縁部~ 肩部1/4	外面に煤付着
126	同上		外面:タタキ後ユビナデ	淡茶色	7 mm以下の砂	良好	底部の	/ FIDI (C)/K11/B
120	ln) T	底径 2.0	内面:ヘラナデ	IXX E	粒を含む(長、 雲)	16.81	み	
127	甕	12.2	外面:ヨコナデ、タタキ後ハケナデ	茶褐色	4 mm以下の砂	良好	口縁部	
八	(土師器) 第8層	_	内面:ヨコナデ、ヘラケズリ		粒を含む(長、 石)		1/8	
128 八	同上	17.6	同上	茶褐色	2 mm以下の砂 粒を含む(長、雲)	良好	口縁部 1/5	外面に煤付着
129	同上	10.8	外面:ヨコナデ、ハケナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	淡茶灰色	6 mm以下の砂粒 を含む(長、雲、石)	良好	口縁部 1/8	
130	同上	15.8		暗灰茶色 淡褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
131	同上	14.0	外面: ユビオサエ後ヨコナデ、ハケナデ (5本/cm)、接合痕(頸部) 1条 内面: ユビオサエ後ヨコナデ、ヘラナデ、接合痕(頸部)1条		6 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/4	
132	同上	13.8			2 mm以下の砂 粒を含む(長、雲)	良好	口縁部 1/8	
133	広口壷 (弥生土器)	16.0	11-4	淡茶灰色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/2	内面に黒斑
八	第9層				1			
134	長頸壷 (弥生土器)	_	外面: ヘラミガキ 内面: 上位ユビナデ (オサエ)、下位ハ	淡灰茶色	3 mm以下の砂 粒を含む(長、	良好	体部 1/2	
八	第9層	体部最大径 15.6 底径 4.4	ケナデ (8本/cm)、接合痕(体部) 1 条		雲、角、石)		底部完 存	
135	同上	8.4	外面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ 内面:ヨコナデ、ヘラナデ	淡灰茶色	3 mm以下の砂 粒を含む(長、	良好	口縁部一部欠	体部外面に黒斑
八		体部最大径 12.9 底径 4.4			石)		損	

遺物番号 図版番号	器 種出土地点	(cm) 口径 法量 器高	1	色調 外面	1 胎 士	焼 成	遗存度	備考
136	董 (弥生土器)	Man.	7.1	茶褐色 淡褐色	2 mm以下の砂 粒を含む	良好	底部の	
九	第9層	底径 4.6	1314. 277	(火作)巴	私で古む		み	
137	同上	-	外面:ユビオサエ	茶灰色	3 mm以下の砂	良好	底部の	
九		底径 4.8	内面:ユビオサエ後ヘラナデ		粒を含む (長)		み	
138	同上	-	外面:ハケナデ	明褐色	5mm以下の砂	良好	底部の	内面に黒斑
九		底径 2.6	内面:ヘラナデ		粒を含む (雲、 チ)	200	み	1 7 14 1 - 111,000
139	同上	_	外面: ヘラナデ、ナデ 内面: ヘラナデ	灰茶色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	内面に黒斑
九		底径 4.6						
140	同上	_	外面:ユビオサエ後ハケナデ 内面:ハケナデ (8本/cm)	淡灰茶色 暗灰色	3 mm以下の砂 粒を含む(長、	良好	底部 3/5	外面に黒斑
九		底径 5.0			石)			
141	同上	_	内外面共にヘラミガキ	暗茶褐色	3 mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
九 142	壷	底径 4.8	M 755 + 0 = 2 25 25 - 25 2 3 1 - 25 4 4 4 4 4 5	and other to the				
九	無 (弥生土器) 第 9 層	_	外面: ヘラミガキ、ユビオサエ、接合痕 (底部) 1条		8 mm以下の砂 粒を含む(長、	良好	底部のみ	外面に黒斑
143	同上	底径 5.0	内面: ヘラナデ、ユビオサエ 外面: ヘラミガキ	淡茶褐色	雲、石) 4 mm以下の砂	A 47	cir to o	
九	,,	底径 6.0	内面:ヘラナデ	灰色	粒を含む	良好	底部のみ	
144	同上	-	外面:ヘラミガキ	暗茶褐色	3 mm以下の砂	良好	底部の	
九		- 底径 4.8	内面:ハケナデ (8本/cm)、ヘラナデ、 接合痕1条	70 X 16 C	粒を含む	156.941	み	
145	無頸壷	12.1		茶灰色	4 mm以下の砂	良好	口縁部	
	(弥生土器)		近に紐孔	N/AC	粒を含む	15/41	~体部	
九	第9層	体部最大径 19.6	内面:ヘラナデ、接合痕(体部)2条		,1010		1/3	
146	甕	12.0	外面:ヨコナデ、タタキ (4本/cm)、	明茶灰色	4 mm以下の砂	良好	1/4	体部外面に煤付着
九	(弥生土器) 第 9 層	一 体部最大径	接合痕(頚部) 1条 内面:ヨコナデ、ナデ	淡茶褐色	粒を含む			
		11.3						
147	同上	14.4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	暗灰色	5mm以下の砂	良好	口縁部	
		本部最大径 本部最大径	内面:ヨコナデ、ユビオサエ、ハケナデ (12本/cm)	灰茶色	粒を含む(雲、		~肩部	
		13.6	(1247 cm)		(角)		1/4	
148	同上	14.2	外面: ヨコナデ、タタキ (5本/2cm)、	茶褐色	5 mm以下の砂	良好	1/4	
		_	接合痕(体部)1条		粒を含む (雲)	20.0	., .	
九		体部最大径	内面:ヨコナデ、ヘラナデ					
149	同上	13.4	Mark the second of the second	hale state e 64				
150		13.0	内面:ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラナデ、接合痕(肩部)2条	淡茶灰色	3 mm 以下の砂粒 を含む(長、雲、石)	良好	口縁部 1/6	口縁部外面に煤付着
130	同上	14.2	外面:ヨコナデ、タタキ (5本/cm)、 接合痕(体部) 1条	茶灰色	5mm以下の砂	不良	2/3	
九		体部最大径			粒を含む			
		15.4	13					
151	同上	14.6	外面:ヨコナデ、タタキ (4本/cm)	淡茶色	4 mm以下の砂粒	良好	口縁部	
九			内面:ヨコナデ、ユビオサエ、ヘラナデ、		を含む(長、雲、石)		~肩部	
		体部最大径	接合痕(肩部)1条				1/3	
152	同上	16.3	外面:ヨコナデ、タタキ (5本/cm)	DD 461 /2	d tot men an out	2.17		
132	141	13.0	内面:ココリノ、クライ(5本ノcm) 内面:ヘラナデ、ユビオサエ、ユビナデ、	明褐色 明灰色	4 mm以下の砂 粒を含む	良好	1/3	
九		体部最大径 15.0	接合痕(頸部)1条	91/// 12	12.5.5.	į		
153	同上	14.6	外面:ヨコナデ、タタキ (4本/cm)	茶褐色	2 mm以下の砂	良好	1/4	外面に煤付着
		-	内面:ヨコナデ、ユビオサエ後ヘラナデ	淡茶灰色	粒を含む	1×1	1/4	/ F.山 V= A木 门 個
-0		体部最大径 16.1						
154	同 上	15.0	内外面共にヨコナデ	明褐色	4 mm以下の砂 粒を含む	良	口縁部	
155	同上	17.0	外面:ヨコナデ、ユビオサエ	明褐色	3 mm以下の砂	良好	1/3	
155					3 mm v2 P (2 MW - 1			

遺物番号	器 種	(cm) 🗆	径	an #6 15 N+	色調 外面	9/4 .L.	da et	净左座	備考
図版番号	出土地点	法量 器	高	調整・手法	内面	胎土	焼成	遺存度	備 考
156	差	16	5.6	外面:ヨコナデ、タタキ、口縁端部にへ	暗茶褐色	5 mm以下の砂	良好	口縁部	
-0	(弥生土器) 第9層		-	ラキザミメ、接合痕(口縁部~頸部)2条 内面:ハケナデ、ヘラナデ		粒を含む		1/3	
157	同上	17	7.0	外面:ハケナデ、ユビオサエ、口縁端部	茶褐色	3 mm以下の砂	良好	口縁部	
			-	にヘラキザミメ、接合痕(頸部)1条	乳褐色	粒を含む(雲)		1/4	
-0				内面:ハケナデ (15本/cm)	North Mills	a bloom of		611 det	三州以下:-洪八美
158	同上	15	9.4	外面:ヨコナデ、タタキ、接合痕(頸部)1条 内面:ヨコナデ、ナデ、接合痕(肩部)1条	淡茶褐色	6 mm以下の砂 粒を含む	良好	口緑部~ 肩部1/4	肩部外面に煤付着
159	同上	1:	5.8	外面:ヨコナデ、タタキ (6本/2cm)、	暗褐色	4 mm以下の砂	良好	3/5	内外面に煤付着
			3.8	接合痕(体部下半)1条	淡茶褐色	粒を含む			
-0		体部最大:	径 2.2	内面:ヨコナデ、ヘラナデ					
			4.8						
160	同上		8.8	外面:ヨコナデ、タタキ (4本/2cm)、	乳褐色	6 mm以下の砂	良好	4/5	外面全域および内面
			3.8	ナデ、接合痕(口縁部~体部)4条		粒を含む(長、			下位に煤付着
-0		体部最大	往 1.4	内面:ヨコナデ、ヘラナデ、ハケナデ、 ユビオサエ、接合痕(口縁部~体部)4		雲、角、石)			
			6.3	条					
161	小型甕		0.8	外面:ヨコナデ、ハケナデ、タタキ (4	淡灰色	4 mm以下の砂	良好	2/3	
	(弥生土器)	体部最大	9.1	本/cm)、接合痕(頸部~肩部)3条 内面:ヨコナデ、ヘラナデ、接合痕(肩		粒を含む(雲、			
-0	第 9 層		1.0	部~体部)3条		(角)			
			3.4	HE IT BE? O ME					
162	甕		-	外面:タタキ	茶褐色	4 mm以下の砂	良好	底部の	
	(弥生土器)	底径:	- 20	内面:ヘラナデ		粒を含む		み	
163	第9層 同上	/EC1主 .	3.8	外面:タタキ	淡褐色	6 mm以下の砂	良好	底部の	内外面に煤付着
	.,		-	内面:ユビナデ		粒を含む	3474	み	
		底径	4.0	NT (1 /)	1.0 400 4	- 1/1	1.17	1-2	
164	同上		_	外面:タタキ(4本/cm) 内面:ヘラナデ	淡褐色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	底部の	
		底径 .	4.0	[1m. (2))		ALCE D		,	
165	同上		-	外面:タタキ (4本/cm)、底部に木の	淡褐色	2mm以下の砂	良好	底部の	
		底径	-	葉文 内面:ヘラナデ		粒を含む		み	
166	同上	Æ(1±	3.6	外面: タタキ (4本/cm)、底部にヘラ	茶褐色	6 mm以下の砂	良好	底部の	
	1.7 22		_	先刻	////	粒を含む(長、	320,73	み	
0		底径	5.0	内面:ナデ、ヘラナデ	41-10 7	雲、角)	4.77	1 to 400 m	
167	同上		_	外面: タタキ後ユビナデ、ユビオサエ、 接合痕(体部) 1 条	茶褐色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
-0		底径	4.8	内面:上位ハケナデ(8本/cm)、下位ユビナデ		45.6 0 0			
168	同上		-	外面: タタキ (4本/cm)、一部ヘラナデ	暗褐色	2 mm以下の砂	良好	1/3	外面に煤付着
-0		底径	 4.4	内面:ヘラナデ		粒を含む			
169	高杯	/EA/PE	4.4 —	外面:ヘラミガキ、四方孔	淡灰茶色	4 mm以下の砂	良好	口縁部	
	(弥生土器)			内面:ヘラミガキ、ナデ、シボリ目		粒を含む(長、	1	のみ欠	
1=2	第9層		2.4	り声・よっ 初くっこがと	沙雪雪	雲、角、石)	,L 1-	損	
170	同上		2.6	外面:ナデ、一部ヘラミガキ 内面:ナデ、シボリ目、杯部中央に径	淡茶灰色	6 mm以下の砂 粒を含む(長、	良好	3/5	
			3.4	10cm前後の突帯状の隆起をもつ		石)			
171	同上	1	4.6	内外面共にヨコナデ後ヘラミガキ	茶褐色	2 mm以下の砂	良好	口縁部	
172		1	-	内外面共にヨコナデ、ヘラミガキ	淡褐色	粒を含む 4 mm以下の砂	良好	1/6	
1/2	同上	4		F32Fml7556-1-0-7-7-5-7-7-7-7-7-7-7-7-7-7-7-7-7-7-7-7	火地生	粒を含む	艮灯	1/4	
173	同上		-	外面:ヘラミガキ、四方孔	淡褐色	3 mm以下の砂	良好	脚部	
		413 437	-	内面:ナデ、シボリ目		粒を含む		1/3	
174	台付鉢	裾径	9.5	内外面共にハケナデ	淡茶灰色	2mm以下の砂	良好	底部	内面に黒斑
1/4	(弥生土器)		_	1.521.000	NAME:	粒を含む	15%	1/3	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
	第 9 層	底径	5.2					-	
175	同上		-	外面:ユビナデ (オサエ)、ハケナデ、	茶褐色	3 mm以下の砂	良好	底部	外面に煤付着
		底径	7.2	接合痕1条 内面:ヘラナデ		粒を含む		1/2	
		ARM ATE	1.2	111111111111111111111111111111111111111	I	1		1	

第3章 まとめ

今回の調査は、対象となる古墳時代前期の堆積層が現地表の面積に比してかなり深いところに位置しているため、事前協議でも安全を考慮するため上面で大幅に掘削面積をとり、法(のり)面をつけて掘削した。しかし、壁面の崩れや周辺からの流水・下層からの湧き水と言った悪条件で「素掘り調査」の限界を感じるものであった。そういったなかでも弥生時代後期末から古墳時代前期の2時期に亘る遺物包含層および生活面が確認できたことは、久宝寺遺跡内でも調査例の少ない当地に新たな知見を加える結果となった。以下、時代毎に調査結果をまとめてみたい。

第1調査区付近で調査区外といえる地点から検出した平安時代後期頃の曲物井戸は、面的にこそ捉えることはできなかったが、これは当地に該期の集落が存在したことを明示するものである。井戸の上層から旧耕土まで層毎に含まれる中世の瓦器椀・土師器、近世陶磁器片と壁面に耕作溝とみられる起伏から、鎌倉時代以降近代まで生産域として土地利用されていた状況を窺い知ることができる。おそらく平安時代後期に存在した村落が、鎌倉時代に入って耕地開発のもとに削平されたのであろう。

古墳時代前期の生活面については、西側の第1調査区は遺構・遺物ともに希薄であり、東側 の第2調査区付近に集落の中心が存在するようである。それは第2調査区内の建造物を構成す るとみられる柱穴(SP-101)の検出、さらにSK-103の大型土坑から土器類とともに生 活用具の一部である木製遺物の検出が挙げられる。木製遺物は布巻き具または糸巻き具・腰掛 け・原始機なる機織りの部材等そのほとんどが紡織具関係であるが、原形を留めるものはほと んど無く、破損して焼却されたとみられる炭化状の断片が坑内に散在している。木製品は土器 や石器とは違い、有機質であるため遺存状態が土質をはじめ諸々の条件において限られ、まし て今回のような破損した個々の部材から全体を復元するのは困難を極める。木製品のなかでは とくにこの紡織具関係が複雑であり、他遺跡の出土例や民族例からの解明が要求される。今回 用途不明とした中の部材もその中に含まれていることは言うまでもない。紡織具以外では農具 として大足や転用材の木槌が含まれ、該期の生活様式および生産形態を究明するうえでは貴重 な資料と言える。大足については「田下駄」とともに現在まで多くの研究者によって検討(駐10) され、「田下駄」が湿田作業において身体沈下を防ぐために使用されるのに対し、大足は施肥 および移植栽培法(田植え)に使用されたと言う見解が一般的とされている。とくに最近では 秋山浩三氏が、『「大足」の再検討』と題し、各遺跡の出土例から大足の形式・構造を綿密に復 原・分類し、田下駄と対比させながらその機能について究明されている(註11)。ここで大足に

ついて特筆したのは、その出土が集落付近に水田の存在を明示するものであり、今後周辺における調査については留意しなければならない課題だからである。市教委の遺構確認調査では、本調査箇所の南側においても数箇所のグリッドを掘削し、そこでは遺物は皆無であったが本調査地で検出した古墳時代前期(布留式古相)の遺構面のレベル値と対応する層位で、水田耕土の可能性がある堆積層が確認されており、南側に水田遺構の存在が想定される。

ここで当該期に関して周辺の調査をみると、本調査地から北東へ約100m地点で当調査研究会が昭和63年度に実施した共同住宅建設工事に伴なう第3次調査(計3)では、ほぼ同時期の方形周溝墓1基と土坑1基を検出している。現段階では、この墓域が今回検出した集落と有機的に関連するか否かについて考察するには周辺での調査例が乏しく、上述の水田遺構を含め今後の調査結果を待って再検討したい。

弥生時代後期末の遺構については、第1調査区で唯一土坑1基(SK-201)を検出したが、第2調査区においては残念ながら下層の厚い砂層から湧き出る水等、悪質な土壌条件から遺構を確認することができなかった。しかし、第2調査区では第1調査区とは比較にならないほど多量の土器類が出土しており、くわえて古墳時代前期の遺構内にも該期の遺物が混在することから、集落の中心部がどちらかと言うと第2調査区付近にあった可能性が高い。

(計)

- (註1) 一瀬和夫 1987.3「第Ⅲ章 調査の成果-検出遺構-」『久宝寺南(その2) 久宝寺・加美遺跡の調査- 近畿 自動車道天理~吹田線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(財)大阪文化財センター
- (註2) 成海佳子他 1991「II 埋蔵文化財の発掘調査 13. 久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」『平成3年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- (註3) 坪田真一 1994「II 埋蔵文化財の発掘調査 8.久宝寺遺跡第18次調査(KH94-18)」『平成6年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- (註4) 田中清美 1986.9「報告2 加美遺跡発掘調査の成果」『古代を考える43 加美遺跡の検討』古代を考える会
- (註5) 尾上実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集 古文化論集』
- (註6) 寺沢薫・森井貞雄 1989.6「2 各地域の様式編年 1河内地域」『弥生土器の様式と編年近畿編 I 寺沢薫・森 岡秀人 編著』木耳社
- (註7) 原田昌則 1993 「Ⅱ 久宝寺遺跡第1次調査(KH84-1)」 『(財)八尾市文化財調査研究会報告37 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会 ※本書では中河内地域で概ね弥生時代後期末から布留式新相(須恵器出現期)に存在する土器類を分類対象として
- (註8) 松村道博・下村智 1994「季刊 考古学 第47号 口絵(モノクロ) 机のはじまり」雄山閣
- (註9) 上西美佐子他 1983「3.調査の成果」『友井東(その2) 近畿自動車道天理〜吹田線建設に伴なう埋蔵文化財発 掘調査概要報告書』(財)大阪文化財センター ※友井東遺跡出土の大足は、足板の周りに梯子形の木の枠を取り付けた大型のもので、ほぼ原形を留めている。 これに類似するものとして、山形市・嶋遺跡の出土例がある。
- (註10) 永島暉臣慎 1978.3 1982.3 改訂「大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告-大阪市交通局地下鉄谷町線延長工事、 第31・32工区の発掘調査-| 長原遺跡調査会 改訂版 財団法人大阪市文化財協会
- (註11) · 宮本馨太郎 1952「田下駄」『日本社会民俗辞典』
 - ・木下忠 1969「おおあし」『民具論集 I』
 - ・中村俊亀智 1976「シロフミ田下駄の諸系列」『国立民俗学博物館研究報告―――』
- (註12) 秋山浩三 1993 「「大足」の再検討」 『考古学研究 第四〇巻第三号 (通巻一五九号)』
- (註13) 西村公助 1989「II 埋蔵文化財の発掘調査 6.久宝寺遺跡(第3次調査:久宝寺4丁目81-1)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告25 八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会

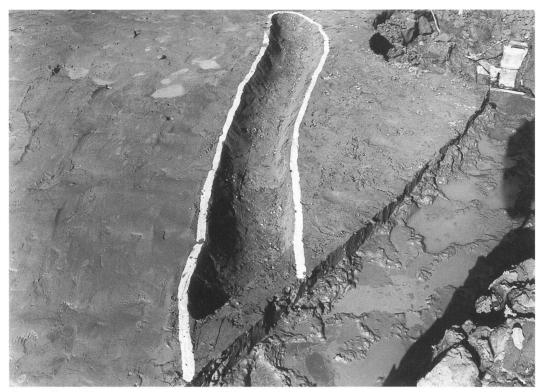
図 版



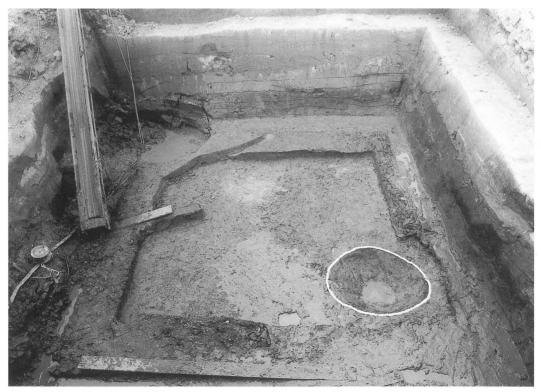
第1調査区 第1遺構面(北から)



第1調査区 第1遺構面 SK-101〈下〉、SK-102〈上〉(北から)



第1調査区 第1遺構面 SD-101 (南西から)



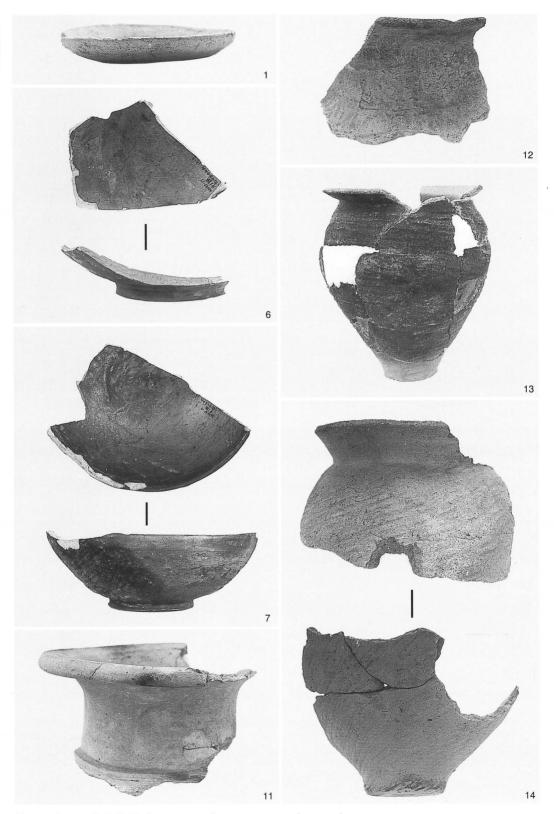
第1調査区 第2遺構面(北から)



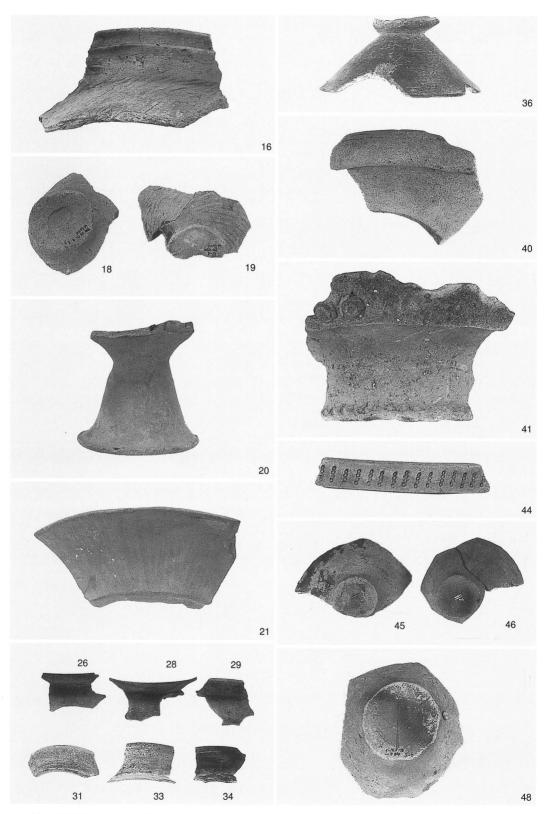
第2調査区 古墳時代前期遺構面(西から)



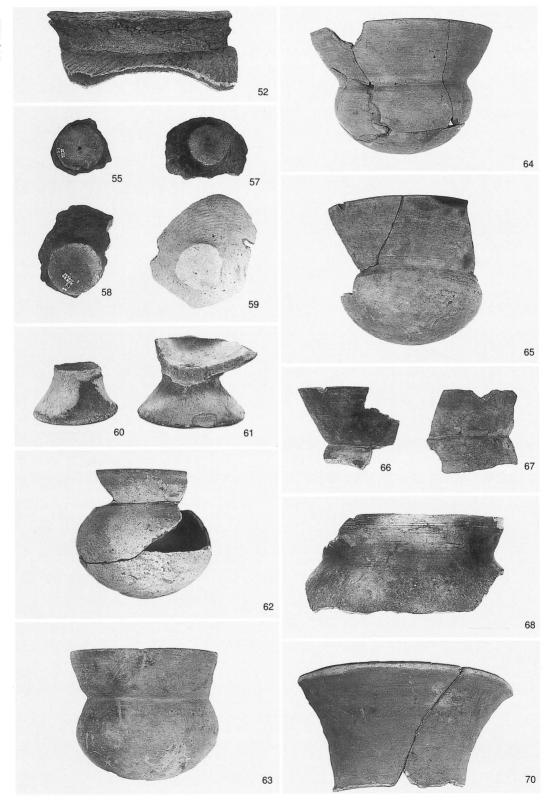
第2調査区 SK-103内木製品出土状況(北から)



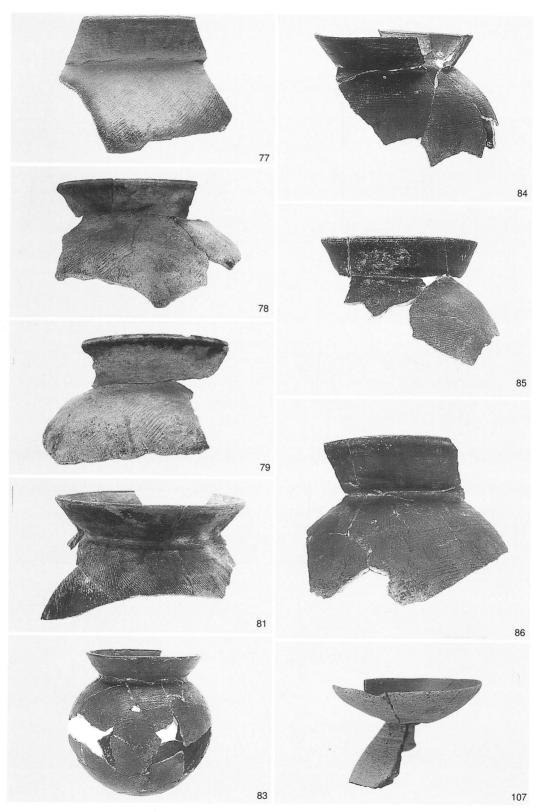
第1調査区 中世井戸(1・6・7)、SK-201 (11~14)



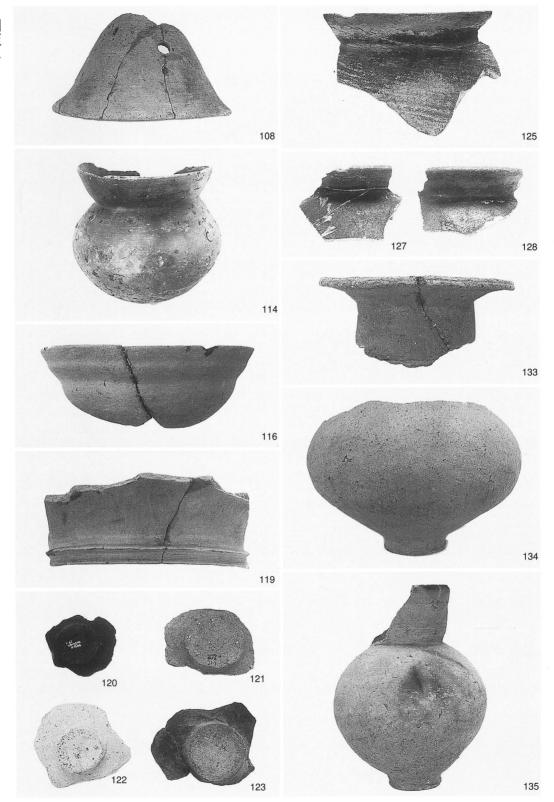
第1調査区 SK-201 (16・18~20)、第8層内 (21・26・28・29・31・33・34・36)、第9層内 (40・41・44~46・48)



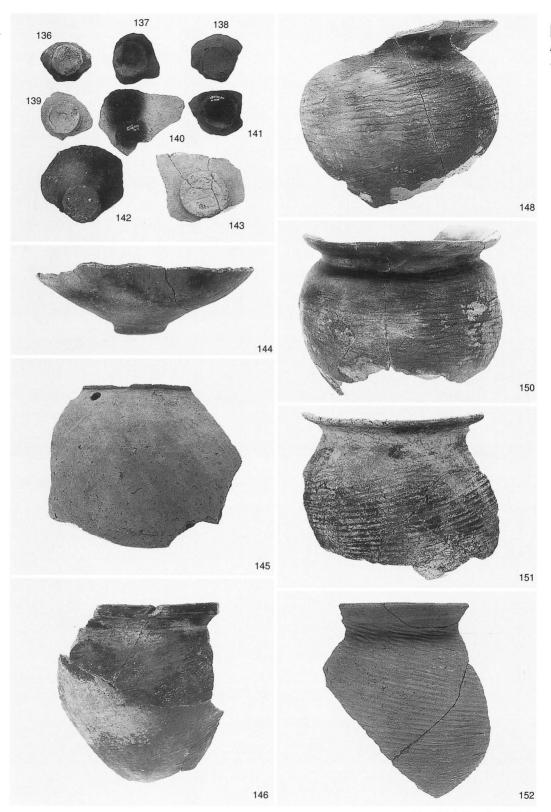
第1調査区 第9層内 (52・55・57~59)、第2調査区 SK-103 (60~68・70)



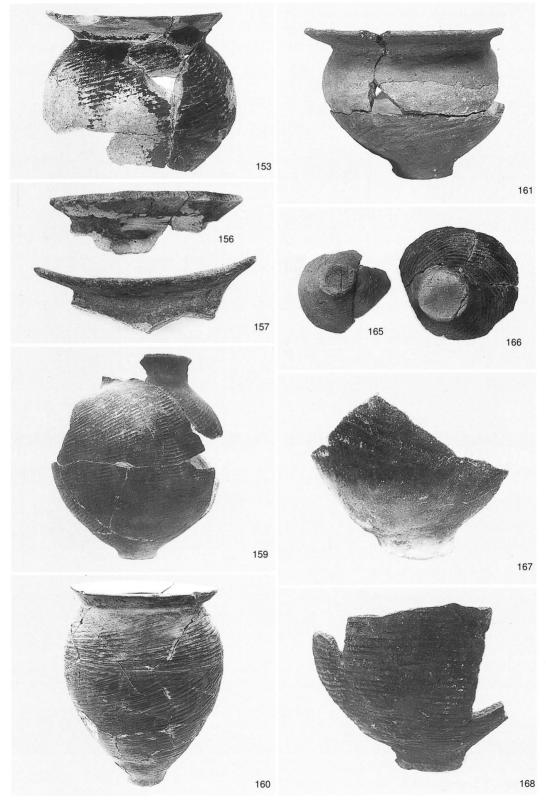
第2調査区 SK-103 (77~79・81・83~86)、SK-105 (107)



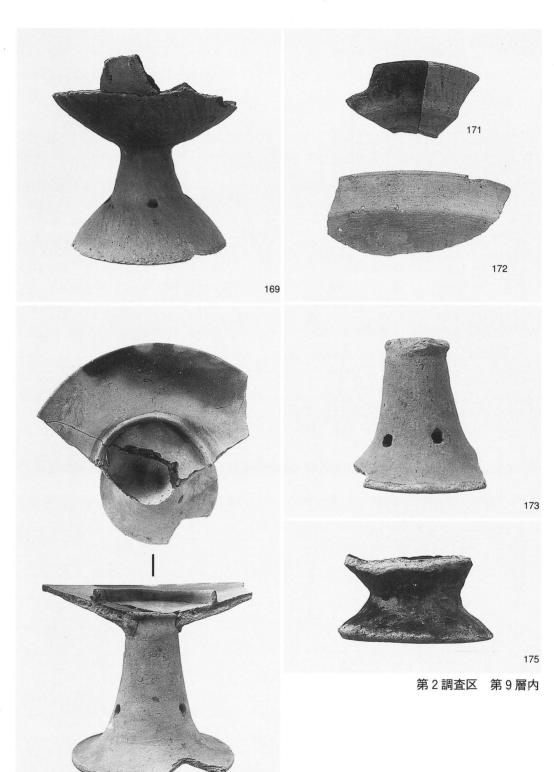
第2調査区 SK-105 (108)、SK-106 (114・116)、 第8層内 (119~123・125・127・128)、第9層内 (133~135)



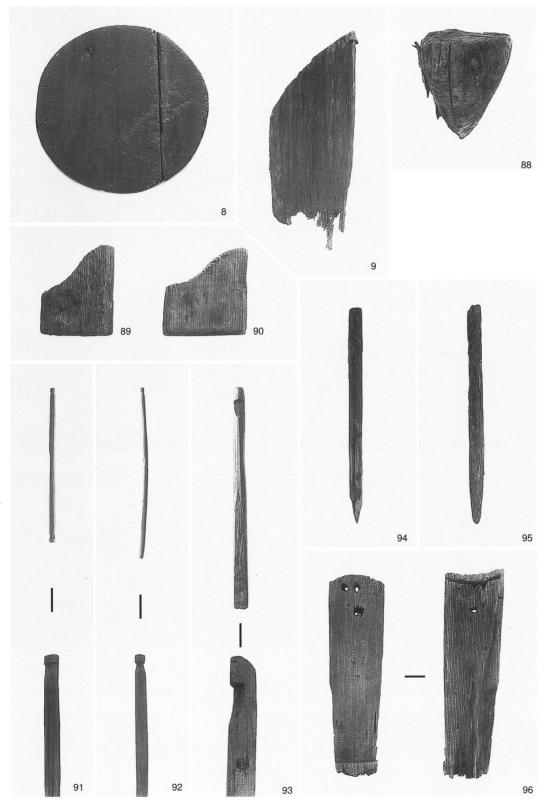
第2調査区 第9層内



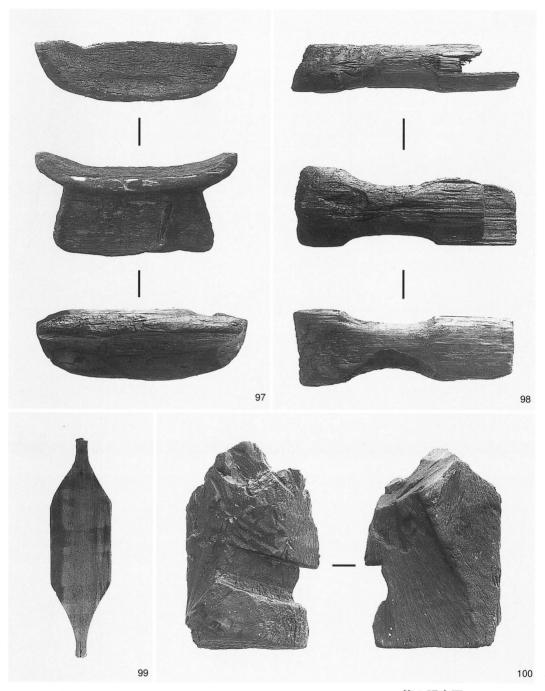
第2調査区 第9層内



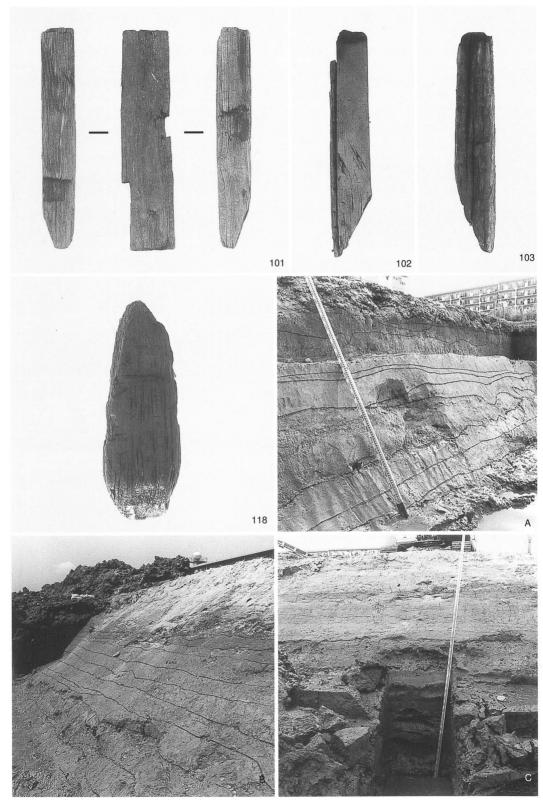
170



第1調査区 中世井戸埋土内 (8・9)、第2調査区 SK-103 (88~96)



第2調査区 SK-103



第2調査区 SK-103(101~103), SP-101(118) A-第1調査区 南壁(東から)、B-第2調査区 西壁(北から)、C-第2調査区 西壁側下層状況(東から)

報告書抄録

ふりがな	きゅうほうじいせき ざいだんほうじんやおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく55
書 名	久宝寺遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告55
副 書 名	Ⅰ 久宝寺遺跡(第8次調査) Ⅱ 久宝寺遺跡(第17次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会
シリーズ番号	55
編集者名	I 坪田真一 Ⅱ 岡田清一
編集機関	財団法人八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581 大阪府八尾市幸町 4-58-2
発行年月日	1997年 3 月31日

ځ	ŋ	が	な	ふ	ŋ	が	な	3 -	k.								- 100	調査	
所	収	遺	跡	所	在	Ë	地	市町村	遺跡 番号	北	緯	東	経	調	查	期	間	面積 (m²)	調査原因
久 (角		身 遺 欠調		大阪市 2 − 2	持入虐市 ? -33	大 莹等		27212		37	度 分 秒	35	5度 i分 i秒		1062 1072	-		650	屋内運動場 建設
		- 遺 大調		1	扩入尾市 140番地	常久宝等		27212			度 分 秒	35	5度 5分 i秒		3071 3073			160	遊戯場及び 駐車場建設

所収遺跡名	種別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	物記事項
久宝寺遺跡		弥生時代後期	溝・土坑	弥生土器	弥生時代後期の集落域
(第8次調査)	集落遺構	古墳時代前期	竪穴住居・溝	庄内式土器	の拡がりを確認
		中世	曲物井戸		
久宝寺遺跡		弥生時代後期	土坑	弥生土器	古墳時代前期の土坑内
(第17次調査)		古墳時代前期	土坑・柱穴・小穴	布留式土器・木	から出土した木製部材
	集落遺構			製品(紡織具・	は、当該期の生活様式
				農具他)	を端的に示す資料であ
		平安時代後期	曲物井戸	瓦器	3

久宝寺遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告55

I 久宝寺遺跡(第8次調査)

Ⅱ 久宝寺遺跡(第17次調査)

発行 1997年3月31日

編集 財団法人八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市幸町 4 丁目58-2

TEL · FAX (0729) 94-4700

印 刷 近畿印刷センター

表紙 レザック66 <70Kg>

本文 書籍用紙 <70Kg>

図版 マットアート<135Kg>

